

新クトゥルフ神話TRPG

帝都モノガタリ

『赤気は

闇夜に至りて』

本シナリオの内容は虚構である。

現実のいかなる人物、団体、その他のものと一切関係ない。

本シナリオでは大正という時代、文化を扱っている為、現代において差別的な表現が含まれている場合があるが、差別を肯定、助長する意図は決してない。

概要

システム	新クトゥルフ神話TRPG
舞台	大正中期 帝都
プレイ人数	2～4人程度
タイプ	サンドボックス+リニア
プレイ時間	オフラインで4時間程度

トレーラー (あらすじ (プレイヤー向け))

あらすじ

「帝都氷河期！」

そんな見出しが新聞にも躍る。こここのところの寒さは異常だ。

寒さをこらえて、銀座に繰り出した探索者たちは知人の作家、九戸康真が空に消える姿を目撃する。

消えた九戸と、そこに残された「いい匂い」を追って極寒の帝都で探索が始まる。

(※極寒はフレーバー程度です)

注意事項

本シナリオは以下の内容、要素を含む。キーパー、プレイヤー各位において注意していただきたい。

- ・いわゆるクラシックシナリオで、探索が必要
- ・ホラー展開あり
- ・吉原、十二階下などの性的な要素
- ・NPCが凌辱されるなどの性的な要素
（探索者は対象外、具体的な描写はなし）
- ・人身売買の要素（時代背景を加味しても犯罪）

キーパー自身はもとより、参加するプレイヤーにも確認、注意を怠らないようにお願いする。

ここより先はシナリオ本体となる。

キーパーか、プレイの予定のないプレイヤーのみ読むようにお願いします。

目次：

はじめに.....	7-	南部の住む長屋.....	25-
あらすじ（キーパー向け）.....	7-	南部の部屋.....	25-
キーパー向け情報.....	7-	探索部：時系列イベント.....	26-
プレイヤー向け情報.....	7-	強まる寒気.....	26-
主なNPC.....	8-	奇妙な男.....	26-
猿子煉（ましこ・れん）.....	8-	吹雪の中の追いかけてこ.....	26-
猿子弥栄香（ましこ・やえか）.....	8-	空に消える南部.....	27-
猿子霧花（ましこ・きりか）.....	8-	錬が目覚める.....	27-
九戸康真（くのへ・やすまさ）.....	9-	煉から話を聞く.....	28-
岩清水義則（いわしみず・よしのり）.....	9-	探索者の家の周り.....	28-
南部鉄也（なんぶ・てつや）.....	9-	追跡者、稗貫.....	28-
梁田秋保（やなだ・あきやす）.....	9-	南部の死体と足跡.....	28-
小笠原浄（おがさわら・きよし）.....	10-	探索部：その他のイベント.....	28-
北上传重（きたかみ・つたえ）.....	10-	帝都上空の怪異.....	29-
稗貫章之（ひえぬき・あきのぶ）.....	10-	異常気象、寒波.....	29-
シナリオの時系列.....	11-	帝都を外から眺める.....	29-
シナリオの導入.....	12-	赤い二連星.....	29-
異常な寒さ.....	12-	クライマックス.....	30-
象潟署の凍った死体.....	12-	赤気は闇夜に至りて.....	30-
聖路加病院の奇妙な患者.....	12-	風に乗りて歩むもの.....	30-
空に消える九戸.....	12-	イタクアの訪問を受ける.....	30-
探索部：調査イベント.....	13-	イタクアに抵抗する.....	30-
聖路加病院.....	13-	錬を渡す.....	30-
聖路加病院の凍った死体.....	13-	錬の囷になる.....	31-
梁田の治療記録.....	13-	イタクアを呼び寄せる.....	31-
行方不明の医者、小笠原浄.....	13-	イタクアから逃亡する.....	31-
浅草象潟警察署.....	14-	「いい匂い」を消す.....	31-
凍った死体を調べる.....	14-	帝都氷河期.....	31-
匂いを調べる.....	15-	結末.....	32-
「いい匂い」を調べる.....	15-	その後の煉.....	32-
「名状し難い匂い」を調べる.....	15-	その後の留水村.....	32-
怪想社.....	16-	正気度の報酬.....	32-
『今様籠釣瓶』.....	16-	参考資料、その他.....	33-
九戸の家を訪れる.....	17-	あとがき.....	33-
巨大な足跡.....	17-	奥付.....	33-
九戸の死体が降って来る.....	17-		
九戸邸.....	18-		
書斎の引き出しの中.....	20-		
九戸の秘密の部屋.....	20-		
九戸の写真.....	21-		
九戸のカメラのフィルムを現像する.....	21-		
写真館「木馬館」.....	21-		
留水村を調べる.....	21-		
池袋、北上民俗学研究所.....	22-		
吉原、妓楼十文字.....	23-		
浅草、十二階下.....	24-		
銘酒屋、鼈遊.....	24-		
深川、南部を探す.....	25-		

『赤気は闇夜に至りて』

the Redness Aurora comes in Dark Night

そして秘め隠されたる土地に関する一見膨大な知識のように思えるものも、既知の土地についての知識と同様、書物から得たのかもしれませんが。

———オーガスト・ダーレス『風に乗りて歩むもの』より

舞台は大正中期の帝都東京。

異常な寒気が襲う中、探索者達は共通の友人が空へとすく上げられるように消えるのを目撃してしまう。

探索者達は帝都で起こる怪事件の真相を探るべく、自由に探索を行うサンドボックス型のシナリオとなる。

探索者は煉の痕跡「いい匂い」とイタクアによって投げ落とされた凍死体を手がかりに、帝都で発生している事件を調査し、煉を保護することでイタクアと対峙することになる。

キーパー向け情報

はじめに

このシナリオは“新クトゥルフ神話TRPGルールブック”（以下、“ルールブック”）に対応したシナリオで探索者2～4人向けにデザインされている。プレイ時間は探索者の作成を含まず、オフラインで探索を中心とした場合に4、5時間程度である（オンラインや、探索以外の要素にも時間を割く場合は、2～4倍の時間を見た方がよいだろう）。

舞台は大正時代中期（関東大震災前）の日本、帝都東京となる。クラシックルール向けだが“クトゥルフと帝国”や、“帝都モノガタリ”を参照して参考にしてほしい。

探索者の年齢や職業、性別に制限はないが、女性や未成年では入り辛い場所へ行く機会があるので、うまい理由が思いつかない場合などを考慮し、少なくとも1人はNPC九戸康真と友人、探索者同士は全員知人であることが望ましい。

このシナリオでは選択ルール「幸運を消費する」（詳細は“ルールブック”95ページを参照）の採用を推奨する。

帝都の寒気は極地より南下してきたイタクアが原因だ。かの神は本来、東北にある留水村（とまりみずむら）で生贄を受け取った後、極地、あるいは宇宙へと帰っていくはずだった。ところが、生贄であるはずの猿子煉（ましこ・れん）が村から脱出して、帝都へ逃げ込んだ。

生贄を受け取れなかったイタクアは、その印である香りを帝都まで追いかけてきている。探索者達に「いい匂い」として認識されるのは、この生贄の印の香りだ。

生贄の印の香りは、煉と物理的な接触を長く続けると移る。特に体液、分泌物は移りやすいため、彼女を凌辱した男たちは同じく「いい匂い」をさせるようになり、イタクアの生贄の目印となる。

イタクアはこの「いい匂い」がする人間を探して、適当に摘み上げている。これはイタクアが煉を引き当てるまでか、飽きるまで続くが、神自身も低緯度までの出張に疲れているうえに煉に対してそれほどこだわりはないため、手痛い反撃を受ければ面倒くささが勝って帰っていく可能性がある。

あらすじ（キーパー向け）

猿子煉（ましこ・れん）はイタクアの落とし子である。

東北のXX県にある留水村は江戸期よりイタクアに生贄を捧げることで村の命脈を保ってきた。煉は生贄となる前に村から逃亡、帝都に出奔した。

帝都は彼女を追って来たイタクアによって異常な寒気に包まれる。探索者はその中で、煉を凌辱した男たち、最初に騙した元女衞の岩清水義則（いわしみず・よしのり）、その後買った作家の九戸康真（くのへ・やすまさ）、そして母親の情人だった南部鉄也（なんぶ・てつや）がイタクアの犠牲になっているのを目撃する。

プレイヤー向け情報

探索者はシナリオの導入部で空に消える作家、九戸康真の共通の友人か、出版、文芸を通しての知人となり、少なくとも顔を知っている人物となる。

彼の作品はともかく、彼自身は人間的に問題がある。このため、強いて友人にする必要はないが、「クズだから仕方ない」と探索のモチベーションを下げない関係に留めてほしい（今は文豪と呼ばれている作家たちの中には、今日の価値観ではおよそ人間的には問題がある人物が多かった。これと同じようなものとプレイヤーを説得するものよいだろう）。

主なNPC

シナリオに登場する主なNPCを紹介する。

各NPCには、「容姿の描写」、「特徴」、「ロールプレイの糸口」を記載しているが、キーパー各位で自身のやり方、シナリオのトーンに合うように変更して構わない。

猿子煉（ましこ・れん）

イタクアの落とし子であり、留水村でイタクアの生贄に捧げられるはずだった少女。

いかにも北国育ちの白い肌に黒い髪を持ち、性的な魅力にあふれている。小柄で華奢に見えるががっしりとした肉体に、かなり毛深い（産毛が濃い）。

逃亡した霧花が村に残した娘だが、弥栄香によって次の生贄だと目されているため、村では下にも置かぬ対応で育てられた。

生贄に捧げられる直前に弥栄香からイタクアを避けるお守りのようなものを盗み、仮病を装って近隣の病院へ搬送され、そこから逃亡して東京に出奔した。

彼女からはイタクアの生贄の印となる「いい匂い」がする。この香りは彼女と濃厚な接触があると移り、同じくイタクアの生贄として認識されるようになる。

貧しい留水村で何もしくとも衣食住が足る生活をしていないため、基本的にわがまま。帝都に出る直前から生贄にされそうになったり、騙されて凌辱されたり、売られたりと嵐のような暴力にさらされたため、精神的に壊れた状態になっている。

彼女がイタクアにさらわれていないのは、蘭花から盗み出したお守りのおかげだ。九戸の家から逃亡したおりにこれを失っており、以降は彼女もさらわれる対象となる。

自分を抱いた男がイタクアにさらわれるのを認識しており、自身が生き残るのを最優先しているため、男たちを犠牲にするのを厭わない。

容姿の描写：いかにも雪国育ちの白い肌に黒い髪を持ち主。はかなげな印象があるが、意外にがっしりとした身体に毛深いのが分かる。

特徴：無口だが、目でものを言う。そのグループの中で一番強い、権力を持つ者などに自然と近寄る。

ロールプレイの糸口：あまり話さずに動作や目でものを言う。身体的な接触が多い。

猿子煉（14）、イタクアの落とし子

STR 100 CON 90 SIZ 50 DEX 120 INT 60

APP 60 POW 100 EDU 35 正気度 10 耐久力 14

DB：+1D4 ビルド：1 移動：9 MP：20

近接戦闘（格闘）50%（25/10）、ダメージ 1D4+DB

回避60%（30/12）

技能：隠密 60%、心理学 60%、跳躍 60%、登攀 50%

イタクアの落とし子の姿となった煉の詳細は、“新クトゥルフ神話 TRPG マレウス・モンスターロム Vol.1 クリーチャー編”の43ページを参照。

猿子弥栄香（ましこ・やえか）

留水村のイタクアの司祭であり、煉の伯母にあたる霧花の姉。

煉と同じく白い肌に黒い髪を持ち、僻地の村特有の苦勞もなく年齢より若く見えるが、その眼光は鋭く厳しい。

霧花の逃亡によって留水村は再び危機に見舞われ、妹の娘の煉を生贄に捧げる決断をした。

留水村の祭祀を司る猿子の家には代々イタクアの血が受け継がれている。このため、風に乗って歩むものと呼び出せるのは猿子家だけの人間であるが、同時にそれは神への生贄でもある。

時折、気まぐれにイタクアが生贄を生きのまま投げ返すときがあり、それが猿子家の起源である。

※弥栄香は留水村を離れないのでシナリオに登場しない。そのため、能力値等は記載しない。

猿子霧花（ましこ・きりか）

故人。留水村から逃亡した煉の母。

猿子家特有とも言える白い肌、黒い髪、そして毛深い。誰をも魅了するような性的魅力にあふれており、華奢に見えるががっしりとした肉感にあふれる肉体を持っている。

弥栄香によってイタクアの生贄に捧げられたが、1年後に地上に戻される。

その際にイタクアの子を孕んでおり、煉を産み落とした。その後、体調を崩して留水村に近い病院へ運び込まれたが、そこから逃亡、東京に出奔した。

右も左もわからない状態の霧花は、女衞の岩清水に上野駅で騙され、吉原の妓楼十文字（じゅうもんじ）に売られる。

十文字では売れっ子とまではいかないが独特の魅力と手管、作家の九戸による私小説の暴露のようなもので人気を上げ、年季を勤め上げた。

その後に廊内でねんごろになっていた南部の元へ身を寄せると、身体を売られるのを強要され夭折した。

霧花はイタクアの下で1年暮らしたがそれについては何も語らない。ただ怯えて口をつぐむだけだ。そして、ただ「ここは地獄だがまだまだ」と同僚の娼妓たちに語ったと言う。

※霧花はシナリオ開始時にすでに死亡しているため、能力値等は記載しない。

九戸康真（くのへ・やすまさ）

帝都の麻布に居を構える作家。売れっ子とは言い難いが、いくつかの作品で評価を得ており、文壇でも中堅と見なされている。

その作品にも反映されているように、暗い情念と、倒錯した性欲を持つ。

元女衞の岩清水から煉を紹介されると、彼女が霧花の娘であると一目で見抜き、言い値で買い取っている。

かつて自分を袖にした霧花への暗い情念はその作品「今様籠釣瓶（いまようかごつるべ）」で昇華されたわけではなく、むしろ怨念を強めるきっかけになっており、煉への凌辱は凄惨を極めたが、イタクアの落とし子として目覚めた煉に逃亡される。

それを追っていたところで、九戸は探索者の目の前でイタクアにさらわれる。

シナリオ開始時に九戸は死亡しているが、回想や演出時などの参考のため、特徴など記載する。

容姿の描写：眼鏡をかけた気難しそうな顔をしている。和装を好み、派手さはないもののよい仕立ての着物を着こなしている。

特徴：表向きは小説家の先生で、一匹狼として弟子も取らずに創作に励んでいる。裏では私小説の作家であるの言い訳に、変態的な性癖を満たしている。

ロールプレイの糸口：普段は雄弁ではないが、自身の作品や江戸時代について語るときはよくしゃべる。酒が入ると陰湿な性格が姿を表して、質の悪い絡み方をする。ねちこく、昔の話を繰り返す（自分の栄光や、他人の失敗）。

※九戸はシナリオ開始時にイタクアにさらわれる、死亡して戻って来るため能力値等は記載しない。

岩清水義則（いわしみず・よしのり）

元は吉原にも出入りする女衞だったが、今はすっかり落ちぶれて犯罪者となっている。

シナリオの開始時前にイタクアにさらわれて、投げ落とされて死亡している。

上野駅や浅草のあたりで田舎から出てきた少女や浮浪者を騙して、ときには人さらいまでやって十二階下や、その周辺の銘酒屋などに売り払って生計を立てている。

上野駅で遭遇した煉を騙して自ら凌辱した後、作家の九戸に売り払った。九戸とは十二階下でのお得意様のようなもので、彼の変態的な性癖を満たすための犠牲者を探してあてがっていた。

※岩清水はシナリオ開始時にすでに死亡しているため、能力値等は記載しない。

南部鉄也（なんぶ・てつや）

深川の辺りに住むヒモ、詐欺師の類で、職業的、組織的な詐欺ではなく、単なるクズだ。顔がよく、特に女性を依存関係にさせるのが得意である。

たまたま金が出来た時に吉原の十文字に遊びに出て、霧花とねんごろになり、たまに金をせびりに行っていた。

霧花の年季が明けた後は、行くあての無い彼女を引き取ったものの、二人そろって堅気の生活には向かなかった。結局、霧花が別の場所で身体を売って暮らし、それは彼女が死ぬまで続いた。

母を訪ねてきた煉を適当にあしらおうとしたが、彼女の性的魅力に抗えず凌辱する。

九戸のように彼女を拘束しようとしたが、簡単に逃げられてしまう。それを追っていたところで、イタクアにさらわれた後、投げ落とされて死亡する。

容姿の描写：俳優や役者のような整った顔立ちをしており、黙っているだけで絵になる。しかし、その顔はすさんだ生活と年齢が隠せなくなっている。

特徴：女性には物腰柔らかく、取り入ろうとして男性には半ばチンピラのような態度をとる。利益に敏感で、金と権威と暴力に弱い。

ロールプレイの糸口：女性には優しく、関係を持とうとし、男は自分に利益がない限りはぞんざいに扱い、金が絡んでない限りは相手にしようとしめない。

南部鉄也（38）、煉の父親かもしれない男

STR 45 CON 65 SIZ 70 DEX 60 INT 55

APP 80 POW 50 EDU 60 正気度 50 耐久力 13

DB：+0 ビルド：0 移動：8 MP：10

近接戦闘（格闘）25%（12/5）、ダメージ 1D3+DB

回避 30%（15/6）

技能：威圧 40%、言いくるめ 60%、隠密 30%、心理学 40%、てさばき 60%、法律 30%、魅惑 80%

梁田秋保（やなだ・あきやす）

留水村の住人。生贄である煉を監視する役割を担っていたが逃亡させてしまい、その責任を問われてイタクアの生贄に捧げられる。

イタクアは生贄の梁田に満足せず、煉を追って帝都へと飛来し、別の生贄の印を持つ対象を見つけて梁田を投げ捨てている。

留水村の住人のほとんどはウェンディゴになる素質を備えているため、神の元で弄ばれても梁田は死亡しなかったが、イタクアの冷気に包まれた状態から、常温に戻るにつれて逆に重度の凍傷のような症状を呈して死亡する。

※梁田はシナリオ開始時にすでに死亡しているため、能力値等は記載しない。

小笠原浄（おがさわら・きよし）

聖路加病院の医者で、運び込まれた梁田の治療を担当した。

博学で、オカルト、民俗学などにも興味を持ち、柳田国男の遠野物語なども好んで読んでいた。

探索者気質で、何かと運と察しがよく、梁田を治療するうちにある程度の真相に気が付く（HPL 作品などに登場するような不遇な主人公のように）。

北上に相談して真相を掴もうとしていたが、その帰りにたまたま帝都上空のイタクアの黒い影と並んだ赤い目を目撃したため、取る物も取り敢えず帝都から逃げ出し、行方不明となった。

※小笠原はシナリオ開始時にすでに行方不明になっており、再登場しないため、能力値等は記載しない。

キーパーへ：小笠原の行方はシナリオ中では明かされないのので、キーパーの都合で登場させて探索のヒントや、彼の考えた真相を語るなどしてもよいだろう。

北上传重（きたかみ・つたえ）

帝国大学を追放された自称民俗学者。本人は日本の民話や伝説の裏にある真実を探求していると言い張るが、荒唐無稽に思えるものが多い（北上は<クトゥルフ神話>を有しており、それを絡めているのだ）。

怪しげな風体に胡散臭い学者ではあるものの、現地に足を運んで実地調査、聞き込みを行っているため、その学説にはそれなりの説得力はある。しかし、師匠筋にあたる柳田国男から絶縁状態にあるため、学会では半ば黙殺されている状態である。

その怪しげな学説に惹かれるパトロン（古井耕一だ）の庇護のもと、帝都の外れ池袋で研究所兼民芸品を扱う店を開いている。

容姿の描写：黒一色の仕立てのよい三つ揃えを着こなし、非常に長身で体格がよいのが目立つ。手足が非常に長く、外国人のようだ。濃い黒髪をポマードの類でしっかりと撫でつけており、やはり外国人のような彫りの深い、凹凸のしっかりとした顔だちで、特に目の部分は落ちくぼんでおり暗い目をしている印象を与える。

特徴：見た目に反して非常に紳士的で、物腰も柔らかい。フィールドワークで培った高い対人関係スキルを有しており、人好きのする性格をしている。民俗学に関わる話に目が無く、話すだけでなく、聞くのにも必ず乗って来る。

ロールプレイの糸口：相手の態度に合わせて自身のスタンスを変えるが、基本的に自身に不利益にならないようにする。怪しげな学説について否定、批判された場合、特に怒る様子もなくただ諦めた表情を見せるだけだ。一度でも彼の学説を信じると気安く打ち解けた様子で話すようになる。

北上传重（36）、怪しげな民俗学者

STR 60 CON 65 SIZ 85 DEX 70 INT 75
APP 50 POW 70 EDU 80 正気度 55 耐久力 15

DB：+1D4 ビルド：1 移動：7 MP：14

近接戦闘（格闘）70%（35/14）、ダメージ 1D3+DB
回避 35%（17/7）

技能：威圧 50%、言いくるめ 60%、オカルト 50%、鑑定 70%、クトゥルフ神話 21%、信用 40%、説得 80%、図書館 80%、民俗学 80%、目星 70%、歴史 60%

キーパーへ：北上はニャルラトホテプではない。探索者にも疑われる可能性はあるが、はっきりと否定して問題ない。

稗貫章之（ひえぬき・あきのぶ）

留水村の住人で、煉の追跡者。

野性味の溢れる外見に、北国にふさわしくない色黒の肌、異様な筋肉質に加えてそれを誇示するような服装をしている（イタクアの影響下の極寒の帝都でも）。

煉が逃亡した後、弥栄香の指示によって村から、彼女を追跡してきて帝都に至っている。

ウェンディゴの特徴が強く出ており、非常に高い身体能力を持つ。

容姿の描写：ひげに覆われた顔は野生そのもので、精悍を通り越して獣じみている。非常に筋肉質で身体のどこもが太く、毛深い。

特徴：無口。コミュニケーションを取らない。目的を遂行するための機械と言ってよい。

ロールプレイの糸口：話さない。行動によって表現し、目的達成のみのために動く機械のような男。

稗貫章之（不詳、30代に見える）、追跡者

STR 90 CON 80 SIZ 80 DEX 90 INT 80
APP 30 POW 55 EDU 30 正気度 N/A 耐久力 16

DB：+1D6 ビルド：2 移動：9 MP：11

近接戦闘（格闘）50%（25/10）、ダメージ 1D3+DB
回避 45%（22/9）

技能：隠密 75%、聞き耳 75%、サバイバル（極地）80%、追跡 75%、目星 75%、においを嗅ぐ 75%

キーパーへ：稗貫は探索者に対する押し引きに使う。彼は煉の痕跡を追っているのだから、基本的にその行動は後手に回る。

シナリオの時系列

事件の時系列を示す。事件と犠牲者の順番がそのままシナリオの流れとなる。探索者の動きによって事件当日以降の動きが変わる可能性があるが、キーパーは適宜対応してほしい。

事件の時系列（事件当日まで）

- 15年前
 - | 弥栄香が、霧花をイタクアの生贄に捧げる。
- 14年
 - | 霧花は戻り、煉を産み落とした後、帝都に逃亡。
 - | 帝都で妓楼十文字の娼妓となる。
- 2年前
 - | 霧花が年季を終え、南部の元へ。
- 1年前
 - | 霧花が死亡する。
- 10日前
 - | 煉は儀式の前に体調不良を訴え、隙を見て帝都に逃亡。
- 8日前
 - | 煉は上野駅で岩清水と出会い、騙されて凌辱される。
 - | 煉は、九戸に売られる。
- 7日前
 - | 弥栄香は煉の代わりに梁田をイタクアの生贄に捧げる。
 - | イタクアは気に入らず、煉を追って帝都に移動。
 - | 弥栄香は稗貫に煉の追跡を命じる。
- 6日前
 - | 帝都にイタクアが到達、寒気に包まれる。
 - | イタクアに梁田は投げ落され、聖路加病院に収容。
- 6～1日前
 - | 九戸は自宅の地下で煉に凌辱の限りを尽くす。
 - | 煉がイタクアの落とし子に覚醒し、九戸から逃亡。
- 5日前
 - | イタクアが岩清水をさらう。
- 3日前
 - | イタクアが飽きて岩清水を投げ落とす。
 - | 岩清水の死体は象潟署に収容される。
 - | 医者の小笠原が逃亡する。以後、行方不明。
- 当日（導入部）
 - | 探索者の目の前で、煉を探していた九戸をイタクアがさらう。

事件の時系列（事件翌日から）

- 翌日
 - | 煉が吉原の十文字を訪れて、霧花について尋ねる。
 - | その後、煉は南部を頼って深川へ行く。
- 3日後
 - | 南部は霧花の子供だろうと関係なく、煉を凌辱する。
 - | 煉はその後、南部から逃亡。
- ※以降は探索者の動き次第。
 - |
- X日後
 - | イタクアに投げ落とされる九戸を、探索者が目撃する。
- X日後
 - | 探索者が煉を追い掛ける稗貫を目撃する。
- X日後
 - | 探索者が煉を発見、イタクアにさらわれる南部を目撃。
 - | 探索者が煉を保護する。
- X日後
 - | 稗貫が煉を保護している探索者の自宅へ侵入する。
 - | 探索者がイタクアに投げ落とされた南部を発見する。
- X日後
 - | イタクアが探索者と煉の元に現れる。

シナリオの導入

探索者達は銀座で空に消える作家の九戸康真（くのへ・やすまさ）を目撃することになる。

探索者たちは個別に、あるいは全員でそれまでに今まで起こっている事件についての事前情報を得る。キーパーは探索者に探索へのモチベーションを与えるようにNPCとの関係性や、探索者同士の関係を構築した、押し引き、飴と鞭を設定しよう。

キーパーは九戸が消える場面では全員が居合わせるようにすること。

異常な寒さ

帝都は異常気象とも言える寒気に包まれており、例年よりもかなり気温が低い。そのうえ、時折大雪と共に強烈な風が吹き付けて、猛吹雪の様相を呈する。

この冷気は煉を追ってきたイタクアによって引きこされている。

探索者に対して特に行動を制限、具体的なペナルティなどの影響はすぐにはないが、防寒着が必要になる、野外では視界が悪いと告げておこう。

キーパーへ：シナリオは冬季を想定しているが、趣味によって夏季の異常気象としてもよいだろう。

象潟署の凍った死体

警察関係者や、探偵、あるいはジャーナリストなどの何らかの事件に関わる可能性がある探索者は、凍った死体の噂を聞く。同僚や同業者、あるいは新聞などから情報を得ればよいだろう。

その噂とは、いわく空から凍った死体が降ってきた、というものだ。

常識的な見解を持つ人々には、凍死した死体が長時間放置されて、こここのところの気温の低下で凍った死体になった、視界に悪さが手伝って、死体がまるで空から降ってきたように見えたのだろうと思われている。

凍った死体は現在、浅草の象潟署に収容されていると言われている。

警察関係者の探索者の所属が決まっていない場合は、浅草にある象潟署にすると探索が楽に進む可能性がある。

探偵などの警察関連以外である場合は、象潟署に知り合いの刑事などがいるとすればよいだろう。

聖路加病院の奇妙な患者

探索者自身が医療関係者か、交友関係に居る場合、聖路加病院の奇妙な噂を聞く。

帝都の吹雪の中、築地の聖路加病院にほど近い場所で、凍死寸前の男が見つかった。病院に運ばれた男は凍死していてもおかしくない状態だったが、治療によって身体の温度が上昇したのが原因で凍死したというのだ。

担当した医者は、その患者の診察から奇妙な事象を見出し、行方不明になったという。

こちらも医療関係などの探索者を聖路加病院に努めているか、関係が深いなどとすると探索が楽になる可能性がある。

医療関係者でない場合、聖路加病院に知り合いが入院している、医者のお手先があるなどすればよいだろう。

聖路加病院：いわゆるミッション系の病院で、明治34

(1901)年に築地病院を前身に開設、大正6(1917)年に聖路加国際病院に改称。大隈重信、渋沢栄一、後藤新平などの政財界人が強力に援助、支援した。関東大震災で倒壊、さらに大正14年には火災と続き、昭和8(1933)年に新病棟が完成している。

空に消える九戸

探索者達は何らかの用事か、ここ最近の事件の話などで銀座に出向く。キーパーは探索者と相談して、何らかの理由を作ってもらおう。ただ、銀座で食事をしようとした、でもよい。

帝都の強い風雪に包まれている。まともな防寒装備なしで戸外にいるのは、短時間でも厳しいぐらいだ。

普段なら人通りの多い大通りも、強い雪と風のために人影もまばらで皆屋内に逃げ込んでいる。

そんな中、探索者達は通りの向こうに知り合いの作家、九戸康真を見付ける。彼はこの寒さの中、比較的軽装で何かに憑りつかれたような様子で必死に風雪に逆らって歩いている様子が目立つため、雪で視界が悪くとも嫌でも目に入る。

探索者達が九戸に注意を向けた後、以下の描写を行う。

――
九戸の後ろから、一際強い風が吹きつけた。

この激しい風雪を隠れ蓑にするように、巨大な影の塊のようなものが、空から現れたように思えた。

態勢を崩した九戸の身体が風にあおられて浮き上がり、宙を泳ぐ。その瞬間、九戸は背後から迫った巨大な、影のような手に掴まれ、中空に巻き上げられて、空へ消えた。

その瞬間、強い風が吹きつけた。そのごうごうたる音は、まるで何かが天から吠えたようにも思えた。

――

黒い影の手に掴まれ、風雪に巻き上げられて空に消える九戸を目撃した探索者は、1 / 1 D 4 + 1 正気度ポイントを失う。

九戸は煉を凌辱したため「いい匂い」、生贄の印が移っている。イタクアは九戸を見つけて、生贄として彼を掴み上げたのだ。

探索者が九戸の居た場所に行くと、そこにはまだ「いい匂い」が残っている。九戸の足跡など、そこに居た痕跡はあるがそれ以外のものは見つからない。

「いい匂い」は形容しがたい、鼻に刺激を与えるような甘い香りでありながら、どこか不快で癖になるような匂いである。

現場を検証すれば、九戸が空に消えたのは錯覚ではない可能性が高いと分かる。何らかのトリックを使えば、視界も悪いのでそれは可能だが、わざわざそんなことをする必要がないのに加えて、探索者がどこから見ているか分からない問題が上げられる。

探索部：調査イベント

空に消えた九戸を目撃した後、本格的な探索が開始される。

探索者の行動に従って、各場所でのイベントを示すが、キーパーの判断で該当の箇所でなくとも同様の探索の結果が得られてもよい。

キーパー、探索者の傾向、趣味に合わせて好きなように改変を行おう。

聖路加病院

留水村でイタクアにさらわれ、帝都で投げ落とされた梁田は凍死しておらず、発見された場所の近くにあった聖路加病院に収容された。

病院は築地にあり、一般向けにも開放されている。

聖路加病院の凍った死体

空から降ってきた梁田は死亡後、引き取り手がないために未だに病院の地下の死体置き場に保存されている。

探索者が病院、医療関係者であるか、なんらかの理由を作って死体を調べようとした場合、治療を担当した医者の同僚に案内される。通常、このような業務は看護婦（当時は看護師ではなく、看護婦である）が行うものだが、死体の異様な状況に加えて、小笠原が行方不明になっているためだ。

死体を詳細に調べた場合、自動的に次の3点が分かる。

- 死体の解凍具合から、最初は完全に凍っていたと思われる
- 凍った後、高所から投げ落としたような痕跡がある

- 「いい匂い」がする

<医学>、<科学（法医学）>に成功した場合、死因は凍死だと思われる。凍っている状態から解凍されて凍死した、という矛盾した結論に至った探索者は0 / 1 正気度ポイントを失う。

探索者が<医学>などを持っていない場合、一緒にいる同僚の医者に語らせるのもよいだろう。

死体からする「いい匂い」は、ロールの必要なく銀座の九戸の跡でしたものと一緒だと分かる。

梁田の治療記録

探索者が医者であるか、聖路加病院の関係者であるなどの場合、梁田の治療記録を確認できる。そうでない場合は、何らかの理由（梁田の知人、あるいは梁田が行方不明の知人かもしれないなど）や手段（忍び込む、医者のふりをするなど）を用いる必要がある。その場合、適宜ロールを要求される。

探索者が治療記録を確認した場合、「プレイヤー資料1：梁田の治療記録」を提示する。

治療記録について確認した場合、患者が譫妄状態で漏らした言葉や、医療行為の記録についてはまったく問題がなかったと保証される（小笠原はフィールドワークの類もよく行っており、聞いたものを書き起こすのも得意だった）。

患者が持っていたとされる金の板は、まだ病院に保管されている。これを見せてもらうには患者が病院の関係者であることが必要。探索者の日頃からの信用度低い場合、<言いくるめ>などのコミュニケーション系のロールを要求される。

金の板と呼んでいるが、5 cm × 3 cm、厚さ5 mm程度の小判のようにも見える長方形の物体である。

金のように見える物質で本物の金かどうかは怪しい。表面と思しき側には緻密な幾何学模様のような文様が刻まれており、裏面は特に加工した様子はない。

<考古学>、<人類学>などでこの金の板に刻まれた模様が、主に極地に住む民族による使用が多いものだと気が付く。

<自然>、<科学（地質学）>などによってこの金の板の材質が既存の物体ではない可能性に気が付く。物体の硬度から考えて、このような繊細な模様を加工するのは難しく、非常に高度な工学的な技術が必要だと分かる。

行方不明の医者、小笠原浄

行方不明になった小笠原について同僚の医者などの関係者に訪ねた場合、「医者ではあったが学究肌で、医学以外にも様々な分野の勉強をしていた。何かと想像力が強いのか、察しがいいのか奇妙な考えをする。それで逃げ出したのではなか」と語る。

行方不明になる直前に、患者が出身であると語った留水村について調べていた。

小笠原の本業は医者だが、民俗学についても玄人はだしの知識を有しており、民俗学の先生と言う北上という男を師匠と仰いでいたようだ。

北上に会いたいなら、池袋にある「北上民俗学研究所」に行ってみるとよいと教えられる。

浅草象潟警察署

象潟署（きさかたしよ）は浅草寺の北側にあり、吉原からもほど近く管轄の警察署となる。

凍った死体を調べる

死体は象潟署の地下、死体安置所に置かれている。探索者が警察関係者である場合、特に制限なく死体の確認は可能だ。そうでない場合、なんらかの理由をでっちあげたり、署

の関係者に依頼したりする必要がある（キーパーは必要に応じてロールを要求してもよいだろう）。

探索者の動機を補強するような理由をつけたり、警察署の人物と関連付けたりするなどすればよいだろう。

象潟署の地下に降りると、そこは外と同じか、あるいはより寒く感じる。係りの者が書類を調べながら、一体の死体を引き出してくる。

探索者の前に提示された死体は未だに凍っているように見える。詳細に調べた場合、次の3点に自動的に気が付く。

- 死体は完全に凍っている
- 凍った後、高所から投げ落としたような痕跡がある
- 「いい匂い」がする

この死体からする「いい匂い」も、ロールの必要なく銀座の九戸の跡でしたものと一緒だと分かる。

<医学>、<科学（法医学）>に成功した場合、次の2点に気が付く。

このひどい寒さによって凍死したと思われていたが、患者は生きていた。発見者によると患者は「まるで空から投げ落とされた」ようだったという。

ひどい吹雪だ、強い風に視界の悪さも手伝ってそのように誤認したのであろう。

患者を診察する。体温が異常だ。0度以下を示している。凍っていないのがおかしい。いや、体温計の問題か。患者の意識は戻らない。

患者の体温は徐々に上昇している。それでもおかしい体温だ。看護婦たちも患者の部屋が外よりも寒いと訴えている。

患者の意識が戻ったが、相変わらず体温はおかしい。身体の動きが緩慢だが、思ったよりも意識がはっきりしている。自身を東北、XX県の留水村の出身で、梁田と名乗った。発見された日付を告げたところ、その日は村の祭りだったと語る。1日でXX県から東京まで出てきたのだろうか。ありえなくはないが単なる誤認だろう。

患者の懐から金の板が見つかる。一時、病院で預かったが、治療費に充てることになるだろう。だが、気になるのは金に描かれた模様だ。どこかで見た覚えがある。

患者の体温が上がるとともに、意識が朦朧とし始め、意味不明な言葉を口走り始める。急激な体温の上昇（と言っても正常値に近くなり始めたのだが）が原因だろうか。

以下、聞き取れた患者の言葉をそのまま記録する。

「歩む死だ……風の神……風に乗って歩むもの……。汝に祈りを捧げん………を捧げん

信心の無きものども、破滅せよ……、……はいずこか。

死とともに歩むものよ、地の上高くわたりゆくものよ、天を制するものよ……。崇めよ……崇めよ……風の神を崇拜せよ……」

患者の体温は正常に近づくものの、さらに譫妄状態がひどくなる。急激に容態が悪化しているが、打つ手がない。

「風に乗って歩むものに……捧げよ

汝を崇める……風の神よ……生贄だ、生贄だ……生贄を捧げねばならぬ。ああ、風に乗って歩むものよ、花嫁を照覧あれ」

患者の言葉が仄めかすものはなんなのか。留水村の何かの信仰だろうか。

留水村については、北上先生に確認に行こう。

プレイヤー資料1「梁田の治療記録」

- 今の帝都は異常な寒さだが、人間が完全に凍ってしまいうほどではない
- 高所から投げ落とされたような痕跡は、生きていうちに付いている

この二つ目の発見は明らかに矛盾している。凍っているはずの被害者が、生きていなければならないのだ。これに気が付いた探索者は0/1正気度ポイントを失う。

凍った死体について係りの者や、署の関係者に確認した場合、第一発見者の証言は以下の通りである。

- 発見時は完全に凍っていた
 - 吹雪の中で、高いところから落ちてきたように見えた
- この証言に対して、凍っているのはこここのところの寒さによるもので、高いところから落ちてきたのは見間違いである、と警察関係者は考えている。
- 「いい匂い」については具体的に何の匂いかなどは調査されておらず、単純に香水などをつけていたのではないか、程度の認識である。

死体の身元は判明しており、岩清水義則という男だ。過去に女衞として象潟署から鑑札を受けていたが現在は失効している。

ここ最近では上野辺りで東北から来るお上りさんを買まえて売りさばくような、怪しげな非合法の人買いのようなものだった。

十二階下あたりでの行動で警戒されていた人物だ（とは言っても、あくまで個人であり、犯罪予備軍なので厳重に監視されていたわけではない）。岩清水が拠点のようにしていたのは、十二階下にある銘酒屋「鼈遊」（べつゆう）である。

匂いを調べる

イタクアの犠牲者とその周辺から漂う「いい匂い」と、九戸の家の地下で見つけたお守りのようなものからする「名状し難い匂い」の2種類の匂いについて調べた場合、以下の情報を得られる。

「いい匂い」を調べる

イタクアの生贄の印、「いい匂い」を調べるには、香りの専門家を頼る必要がある。

一番良い方法は直接、犠牲者から「いい匂い」を嗅いでもらうことだが、それは無理な可能性が高い（探索者の取った手段にもよるが）。犠牲者の一部や、身に付けていたものに香り移っており、それで十分だとする。

香りの専門家については、科学的な調査を行う機関や専門家を頼るほか、化粧品や医薬品の専門家を頼るのも可能だ。

この時期は江戸期から伝統的化粧品から、西洋風の化粧品へ切り替わるのが一般にも広がる時期である。主に輸入品だったものが資生堂をはじめとした国産のものが出回り始める

とともに、富山の薬売りのような販売方法ではないいわゆるドラッグストアのようなものも出てきた時期である。

銀座にある資生堂の化粧品部や、デパートの化粧品売り場などで、香りを再現してもらうなどとすればよいだろう（完全に同じものを再現するのは困難だが、似たような「いい匂い」は作成可能だ）。

専門家を頼るなど、「いい匂い」について調べた場合、以下の情報を得られる。

- 普通の化粧品とは思えない
- 麝香のような動物由来のアンモニアのような臭いと思われる。普通の香水にも使われるが、それが強い
- どちらかと言えば獣臭に近いのではないか。猫の臭いのような癖になる香り
- 普通の香水ならそんなに長くは残らない。環境にもよるが、1日も経てばほとんど残っていないはず

犠牲者や煉からする「いい匂い」、イタクアの生贄の印は、その成分の詳細は不明だが、イタクアやウェンディゴの身体の一部や分泌物を成分としている。

「いい匂い」は、煉や犠牲者自身が発するようになる香りである。通常ならば決して「いい匂い」などとは言えないはずだが、何故かそう感じてしまうフェロモンのようなものである。

「名状し難い匂い」を調べる

九戸宅の秘密の地下室に落ちている、紐が切れた大きめのお守り、あるいは匂い袋のようなものに入っていた物質からする匂いである。

物質は荒い粉末状で、黒っぽく、生物、あるいは植物を乾燥させたように思わせる小さな白い斑点がところどころに見られる。

この物質から「いい匂い」に似ている気がするが、どこか磯臭い、海辺に住む日本人にはなじみ深い香りがする。

こちらも「いい匂い」と同じように調査、専門家に分析などを依頼した場合、なんの動物かは分からないが、おそらく生物由来の何かであるのは推測できる。

これはフェロモンのような物質ではなく、単純にその生物自体が発するような匂いではないかと思われ、「いい匂い」が甘いと形容してもよいのに対して、こちらは「名状し難い匂い」で濁ったような香りである。

この「名状し難い匂い」は神話的生物の一部である。

乾燥させて粉末状になるまで砕いてあるが、まだ生きている。自己再生するには大きさが足りないため、生贄などを捧げても元には戻らないが、十分にMPを捧げて活性化すればこの匂いはイタクアを嫌がらせて、遠ざける。

探索者はこの謎の粉末が、生贄のMPを吸い取っているところを発見時に目撃しているため、MPを捧げてこの物質が活性化すると推測できたとしてもよい。

煉にこの物質の入った袋を見せた場合、それは自分のもので母親の形見、または母親を探す手がかりになるので返して欲しい、と訴える。

実際は煉が留水村から逃げるときに、弥栄香から盗み出したものだ。母親の手がかりになる可能性はあるが、実際は単に嫌がらせ、あるいは無自覚にでもこの袋の中の物質がイタクアを遠ざける効果を認識していたためだ。

代々、猿子家の人間がイタクアの祭祀を務めてさらわれたいのは、イタクアの血を受け継いでいるのと、この物質のおかげだ。

資生堂化粧品部：大正5（1916）年、資生堂は銀座のソーダファウンテンから化粧品部門を独立させて、通りを隔てた向かい側に化粧品部を開店した。1階部分は店舗で、2階以降で化粧品の製造や、デザインなどを行った。

怪想社

怪想社は本郷区千駄木、団子坂にある。報道、文学、オカルト、民俗学等に関係がある探索者ならばその所在は知っているもおかしくはない。怪想社は草創期には真面目な民俗学方面の書籍を取り扱う出版社だったが、現在は総合雑誌『怪想』を含めて、主にオカルト、怪しげな噂を取り扱うようになっている。

探索者が報道、出版関係者ならば怪想社の所属、フリーの場合は顧客、知り合いの編集者が居るなどとしてもよいだろう。

空にさらわれる九戸を目撃した後、彼に関係が深い出版社の怪想社を訪ねるか、あるいは凍り付いた死体について怪しげな情報を得るために訪れればよいだろう。

作家の九戸の作品は大手で取り扱っていた時期もあったが、今は代表作の『今様籠釣瓶』も含め、ほとんどが怪想社から出版されている。

九戸について、特にロールの必要なく以下の情報を得る事ができる。

- 九戸は麻布に洋館を建てて一人で暮らしている。
- 昔から女遊びが好きだったが、最近は十二階下などの非合法な場所に入り浸っているらしい。
- 人買いのような連中と付き合いがあるとほのめかしていた。

これらの情報は現代ではいわゆる個人情報が含まれているが、まったく問題はない。当時の感覚では、雑誌や新聞など記名の記事が普通であり、住所や連絡先などの個人情報の掲載もごく当たり前に行われていた。

怪想社の編集者など、九戸の情報を探索者に教える代わりに、様子を見に行きたくて欲しいとそれとなく頼まれる。

編集部としては原稿が出ればよいが、お縄になって連載が中止とか、出版差し止め、発禁などにならないか心配している。

『今様籠釣瓶』

九戸の代表作であり、出世作。今でも書店に並んでおり、貸本屋で多く見られる。

怪想社が出版している総合雑誌「怪想」に連載されていたもので、その後と同じく怪想社から単行本として出版された。

探索者が買うか借りるかして読んでもよいし、文学好きならばすでに読んでいてもよい（文学に造詣が深いNPCに尋ねるのもよいだろう）。

読むには2時間程度、斜め読みで30分はかかる（ただの書物なので技能の増加、正気度の喪失はない）。

『今様籠釣瓶』の内容は以下の通りである。

ある男が友人に連れられて吉原へ赴く。その気はなかったが遊ばない方が野暮であると焚きつけられて、勧められるままに妓楼の遊女四ツ橋と遊び、どっぷりとはまって深い仲になった。

身請けの金が出るまで待ってくれと男は言うが、そんな大金が簡単にできるはずもなく、また四ツ橋の方も大金持ちの客に見初められて男を見限る。

男が身請けの金を苦勞して作って、再び四ツ橋のもとを訪れるものの、すでにその客によって位が上がっており、男の用意した金額では足りなくなっていた。

しかし、楼主の計略によって身請けに用意した金をだまし取られ、男は四ツ橋に慕情と恨みの籠った手紙を送る。

それは知らない四ツ橋は、大金持ちの客の身請けを待つものの事業に失敗してそれどころではなくなっていた。

落ちぶれた四ツ橋が、男の手紙を読むところで小説は終わっている。

世間の評判はともかく、九戸を知るならば小説の内容の大半が彼の主観に沿っているとともに、都合よく捻じ曲げられているのが分かる。

九戸がそもそも身請けの金を作らないだろうが、四ツ橋とされている娼妓に対する恨みの籠った慕情は私小説らしいとも言える。

登場する四ツ橋はおそらく実在だが、そこまで悪女ではないだろうと予想できる。昔の話であるため、この四ツ橋のモデルとなった娼妓は分からないが、妓楼はその時期に彼がよく出入りしていたのは吉原の十文字がモデルだと分かる。

籠釣瓶：明治 21 (1888) 年に籠釣瓶花街酔醒 (かごつるべさとのえいざめ) が初演、大正 7 (1918) 年に岡本綺堂の籠釣瓶が出版された。江戸期に吉原で起きた「吉原百人斬り事件」を元にした演目、作品で、その際に使われた銘刀籠釣瓶に由来している。本シナリオとは全く関係ないが、こういった作品もある、と知らせてもよいだろう。

九戸の家を訪れる

九戸の家は麻布区にある。その詳しい住所などは知り合いである探索者がすでに知っているか、九戸と関係が深い出版社、怪想社で確認できる。

麻布は江戸の初期は坂の上の高所は藩邸や寺など、水はけの悪い低所は下級武士の家などではっきりと上下が分れる町だったが、江戸中期から徐々に土地の改良が進み、明治期になるとさらに開発されて、工業化が始まる。

大正 3 年に市電の材木町駅が出来たてから花街ができて、麻布十番を中心に盛り場として栄えたが、その周辺は寺と要人の邸宅の多い閑静な住宅街だった。

探索者たちは最寄りの市電の駅、材木町駅から高地に向かって坂を上っていく。電車を降りた時点でかなり天候が悪化しており、吹雪とも言えるような風雪が吹き荒れているがさすがに市街地で遭難するほどではない (探索者の装備が軽い場合はその限りは無い)。

探索者によっては車で行こうとする可能性があるが、その場合この悪天候のうえに坂の多い麻布では<運転 (自動車)>をハード以上の成功が必要であると事前に伝えておく。

巨大な足跡

九戸宅への道すがら、舗装のされていない凍った坂を注意いしながら歩いていくと、最も<幸運>の低い探索者は地面にできた段差に足を取られて転倒する (雪が厚く積もっているため、特にダメージなどは無い)。

探索者が車で移動している場合、<運転 (自動車)>のハードによって搭乗者、車両とも無事に済むがそうでない場合、車は穴にはまって止まり、搭乗者はその衝撃によって耐久力に 1 D 4 ポイントのダメージを受ける。

足を取られた探索者がその段差を確認すると、それは道の真ん中に巨大な陥没があった。

今は雪に覆われているが、それは巨大な足跡のように思える。

それは疑いようもなく人間に酷似した、途方もなく巨大な足だったが、その指の間には水かきのようなものがついてた。

この巨大な足跡を発見した探索者は 0 / 1 の正気度ポイントを失う。

足跡は調べる必要もなく、こんな足跡を持つ生物は存在しないと分かる。

足跡を詳細に調べた場合、この足跡を人の手で作ろうとすると舗装されていないとは言え固い道の上に作るのには相当な労力が必要だ。それに加えて、こここのところ続く悪天候の中でこの作業を行うのは正気の沙汰とは思えない。

<自然>や、<追跡>などによってこの足跡は、九戸が攫われた日ぐらいに付けられたと推測できる。また、足跡の持ち主を人型であると前提にした場合、その歩幅と推測できる範囲内に同様の足跡は存在していないのが分かる。

九戸の死体が降って来る

探索者達が坂を上っているとともとも悪い天気がさらに悪くなり、空は黒く厚い雲が覆い、うなりを上げて吹き荒れる吹雪のような様相を呈し始める。

坂を上りきって九戸の家が見える場所まで来ると、一際強い風が吹きつける。

猛烈な勢いの風は雪が吹き付け、さらに地面に積もっていた雪を巻き上げて探索者の視界を白く染められたところで、はっきりとしない視界の中で、何かが落ちて来るのを探索者は目撃する。

重く、湿った音がして、九戸宅の前に何かが投げ出されたように思える。

それは作家の九戸だった。凍り付いて白くなっているが、銀座で見た格好のままだ。

象潟署で見た岩清水の死体のように凍り付いており、周囲よりも温度がさらに低いのか、まるで湯気のような冷気が死体からは漂っている。

九戸は身体をのけぞらせて何かを求めるように、あるいは遠ざけるように両手を突き出していた。

だが、何よりも恐ろしいのは、目を見開き、冷気が漏れる口は絶叫を形づくり、恐怖に歪んだ顔のまま凍っていることだった。

この異様な九戸の死体を目撃した探索者は 0 / 1 D 4 正気度ポイントを失う。九戸と親しい場合、失う正気度ポイントはさらに + 1 ポイントされる。

九戸へ近寄った場合、この猛吹雪の中でも死体からは「いい匂い」がする。

強い風が吹いているとは言え、死体の周りには探索者の痕跡以外は存在していない。凍った死体の雪の埋もれ具合からも、かなりの高所から落ちてきたように思えるが、周り高い建物は存在せず、強いて挙げるならば九戸宅が 2 階建てである。

岩清水の死体を見たならば、九戸の死体が身体の中まで凍り付いているのは予想できる。触って確認した場合は、氷の

ように固いのではなく何故か通常よりも少し硬い程度だが、氷よりも温度が低いのが分かる（素手で触れた場合、耐久力に1点のダメージを受けるほどに凍っている）。

この状況下で死因の特定は難しく、凍死なのは疑いないが、生きたまま凍らされたという表現の方が正しいだろう。

死体の持ち物などを調べても特に何も出てこない。銀座で目撃したときと同じ格好であると確認できるほか、普通持っているようなもの（財布やタバコなど）も持っておらず、着のみ着のまま、よほど急ぎか何か尋常でない事態が起こっていたのであろうと推測できる。

九戸の死体をどうするかは探索者次第だが、一旦は九戸宅へ保管、家探しの後で通報するなどすればよいだろう。ちなみに九戸宅には電話が引いてあるが、今は吹雪の影響で不通となっている。

九戸邸

九戸の家は一見、洋館のように見えるが2階建てのいわゆる文化住宅である。流行の少し前に建てられたため、見た目は和洋折衷だが完全に木造で、壁はペンキで白く染められている。

彼の趣味を反映してか、上下階ともベランダもサンルームなどもない総二階である。

あまり手入れの行き届いていない庭には草木が鬱蒼と生い茂っており、外から見るとひどく不吉な暗い印象を与える家に思える（これは探索者がここに来るまでに、不吉なものを見過ぎたためとも言えるが）。

九戸邸の玄関の扉に鍵は掛かっていないが、裏の勝手口と風呂焚き場の扉には鍵が掛かっている（<鍵開け>の他、破壊は容易だし、この天候の状況を考えれば目撃される確率は低い）。

中に入ると多少は冷気が和らぐものの、外と同じぐらいに寒く、明らかに人が無い。ただ、風雪が凌げるだけでも随分と気が楽になる。

九戸邸の玄関は一畳そこそこの土間だけで、目の前には2階への階段、脇の廊下の手前と奥に扉があるのが見える。

九戸邸では書齋以外で手がかりらしい手がかりは手に入らないが、キーパーの判断によって何らかの手がかりが見つかったり、無関係な泥棒や浮浪者が入りこんでいたりするなどのイベントを用意してもよいだろう。

探索者が調べられるのは次の通りだ。

食堂兼台所

ガスコンロを備えた洋風のキッチンに椅子とテーブル、食器棚などがある。元は土間に台所だったものをわざわざ改造したように見える。

キッチンなどを調べた場合、しばらく使われていないのが分かる。台所の棚や床下を調べればこの寒さから食品の類も

あまり傷んでおらず、一部は凍り付いているがまだ食べられるものが発見できる。

また、ガスコンロを使うためのマッチや、包丁などの台所で使う道具の類もここで手に入れられる。

女中部屋

空でホコリが積もっている。長い間使われていないように見える。九戸は通いの女中を雇って家事を任せていた。

風呂

凍り付くような冷気が漂っており、風呂の水も凍っている。

内風呂も珍しくない時代になりつつあるが、やはりそれなりに金持ちでなければ銭湯に通うのが多い時代だ。

風呂焚き

外気が入りこんでいるせいか、雪の吹き溜まりになっている。薪など雪に埋もれており、風呂の火をおこすのは困難だ。

寝室

九戸が使っていた寝室で、寝具などが出しっぱなしになっている。

家の中で唯一、生活感を感じる場所であるが、しばらく使われた形跡はないように思える。

<目星>に成功するか、特に布団を調べた場合、そこから「いい匂い」がするの気が付く。

納戸

雑然と様々なものが詰め込まれて、うっすらとホコリが積もっている。確認するまでもなく、しばらく扉すら開けられていなかったと分かる。

普通の家でありそうな道具類ならば、<幸運>に成功した場合、ここで見つかったとしてもよい。

また、閉め切っていたため、この部屋が九戸宅の中では一番暖かいのが分かる（多少マシな程度だが）。

2階の書庫

部屋には大小さまざまな本が入る本棚が並んでいるだけでなく、木箱も雑然と積み込まれている。

<図書館>か、1日かけてじっくり調べた場合、こちらの書庫も1階の書庫と同じく九戸の創作の資料が中心で、江戸時代の黄表紙から現代の研究書まで幅広く置かれている。

書棚の奥に行くほど古い本が多いが、<図書館>に成功しているか、<目星>に成功した場合、書棚に隠された九戸の秘蔵の本と写真を発見する。

九戸の秘蔵の本は1階の書齋と同じく、責め絵などの加虐、被虐趣味の春画の類に加えて、発禁本や好事家向けに一般に流通していないものなどが出て来る。

写真は彼の加虐趣味の犠牲者の写真である。現像の具合や、写真の撮り方など1階で発見できる写真と同じであるため、九戸自身がこの写真を撮影したのが分かる（＜芸術／製作（写真術）＞などがあれば、高い確率で同じ撮影者、現像所だと分かる）。

SM 趣味：SM という単語は戦後どころか昭和40年代になってからだが、明治中期にはすでに異常性欲を研究した海外の医学書が翻訳され、発禁になっていた。大正2（1913）年に再び『変態性欲心理』として翻訳、有識者の間で変態ブームを起こすきっかけとなり、サディズム（サド）、マゾヒズム（マゾッホ）と言った単語が広まった（さらに進んだエログロナンセンスは昭和初期）。また日本でも、加虐趣味、被虐趣味は珍しくなく、伊藤晴雨の責め絵など有名である。

1階の書斎、書庫

書斎、書庫とも部屋の四方に書棚が作りつけてあり、様々な本が配置されている。部屋の奥、書棚の隙間にある窓の前に机が置かれており、九戸はそこで作業をしていたと分かる。

- 机を調べる

机の上や、鍵の掛かっていない引き出しからは九戸の書きかけの作品の一部や、メモ、徒然に綴った落書きのようなものが入っている。

鍵の掛かった引き出しは、＜鍵開け＞か、鍵を破壊して開けられる。その中には九戸の手書きの原稿、手持ちカメラと多数の写真が入っている。

なお、引き出しを破壊して開けた場合、九戸の死亡を通報した後に面倒になる可能性があるのは示唆しておく。

- 書棚を調べる

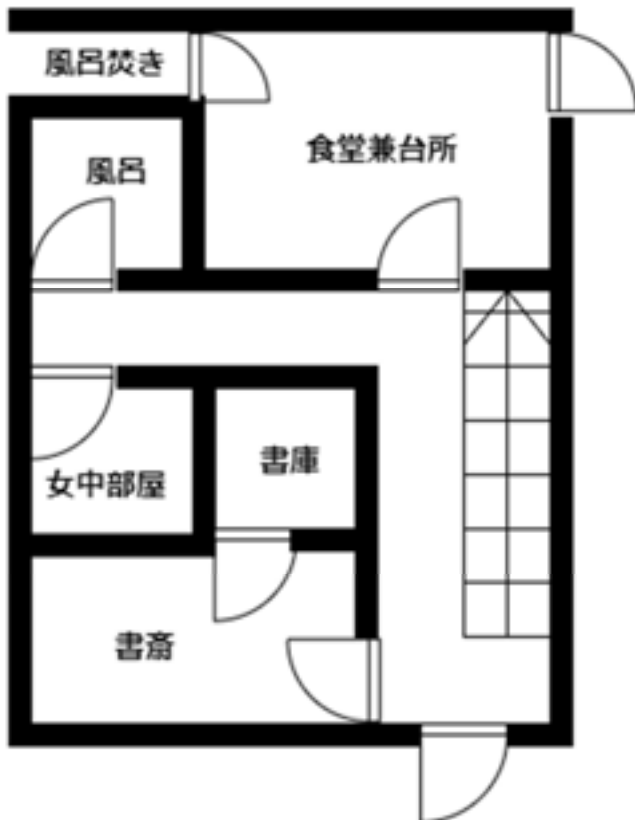
特にロールの必要はなく、書棚がずれていると気が付く。

- 書庫、書棚の蔵書を調べる

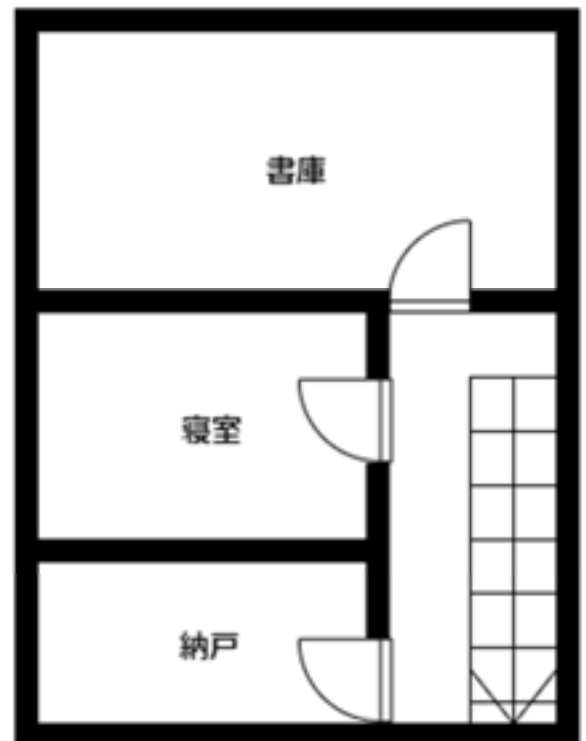
九戸邸

外観は洋風だが、和洋折衷の文化住宅。
外壁は白いペンキ塗り。

1階



2階



じっくりと書棚を調べるか、特に何か隠してありそうな場所を指定して調べるなどすると、いわゆる江戸時代の春画

から、最近の変態雑誌などポルノ、とくにSM趣味のものが
見つかる。

<図書館>で置かれている本の大半は江戸、明治初期に関わ
る作品や論考、資料となるようなもので、彼の作品の傾向を
表している。

書棚の一部がずれているのは、地下の隠し部屋に通じる隠
し扉が破壊されているためだ。本来は<目星>や<機械修理
>などで開閉の機構を発見できるものだが、煉が逃亡する際
に破壊されて完全に閉まらなくなっている。

探索者が書棚のすきまに力をかければ、難なく隠し扉は横
にスライドして地下への階段が現れる。

書斎の引き出しの中

書斎の引き出しの中は雑然と物が詰め込まれている。一
見、無秩序に見えるがこれは使用者本人には分類が出てきて
いる状態だ。

カメラと写真

引き出しに入っていた手持ちカメラは当時としては高価な
代物で、フィルム、現像代も馬鹿にならない。カメラの中に
フィルムは残っているが、この家の中に現像のための部屋や
施設はないため、どこかへ現像に出しているのだろうと察せ
られる。

写真の多くは様々な女性の裸やそれに近い写真だ。年齢や
職業も幅が広く、着飾った商売女から浮浪者の少女のような
ものまで混じっている。書棚にあった春画のSM趣味の写真
はない。

九戸の原稿

引き出しの中の原稿は机の他の原稿やメモ等と比べれば、
筆跡が同じであると一目瞭然で、九戸のものとは分かる。

原稿は古いものの束と、書き散らされてまとめられていな
い新しいものがある。新しい方はインクの具合などから、ご
く最近書かれたものだと分かる。

九戸の原稿を読むのに<日本語>は必要ないが、かなり達
筆であるため読むのには苦勞する。すべての原稿を読むに
は、ロールの必要はないがそれぞれ4時間ずつの解読時間が
必要だ。

● 古い原稿

彼のヒット作の『今様籠釣瓶』の原形らしきものだ。

江戸時代の吉原ではなく現代の吉原を舞台としている。九
戸と思われる男が、Kと略された娼妓に溺れ、破滅する様子
が描かれている。

彼らしい怨念のこもった筆致だが、どちらかというとポル
ノ小説に近いもので、Kから「いい匂い」がしたと繰り返し
書かれている。

● 新しい原稿

彼のヒット作の『今様籠釣瓶』の続きらしき内容だ。

江戸時代ではなく現代を舞台としている。九戸と思われる
男が、Kと略された娼妓に捨てられた後、その娘らしき少女
を拾う。

最初、男は少女を憐れんで優しく接していた。だが、少女
からする「いい匂い」に狂わされて、責め苛むようになる。

彼らしい湿度の高い筆致だが、完全にポルノ小説で、男が
少女を攻めたてる内容が大半を占めている。完結しておら
ず、書きかけだ。

九戸の秘密の部屋

書斎に設置されている書棚の隠し戸から降りられる地下室
である。

隠し戸を開けた時点で獣臭と排泄物、体液の中に例に「い
い匂い」が混ざった異様な臭気に襲われる。

階段、その先の地下室に灯りは無く、真っ暗だ。探索者が
灯りを持ち合わせていない場合、九戸の家を家探しすれば懐
中電灯やオイルランプ、マッチ、何か燃やすものを見つける
のは容易だ。

探索者が狭い階段を降りると、ちょうどそこは書斎の真下
にあたるのが分かる。

部屋の壁と天井はコンクリートに覆われており、窓なども
ない。壁や床には黒ずんだ赤いものや、黄色いものが飛び散
った染みを作っている。

部屋には洋を問わない大小様々な拷問器具が置かれてい
る。調べるまでもなく、これらは最近使った形跡がある。

奥の壁にはおそらく手枷であったと思しきちぎれた鎖と壊
れた鉄の輪が落ちており、床には巨大な獣のようなものが暴
れたような痕跡が残っている。

この部屋を調べた場合、『九戸の新しい原稿』にある通
り、ここで彼が買った「あの女の娘」に対して苛烈な加虐、
凌辱をしていたのが分かる。

例の「いい匂い」も部屋の中に残っており、間違いなくこ
の香りを発しているのは被害者の娘である。

また、引きちぎられた鎖の近くに、紐の切れた大きめのお
守りか、あるいは匂い袋のようなものが落ちているのに気が
付く。

この袋を拾い上げた場合、凍り付くような寒さの地下室の
なかで何故か湿り気を帯びているのが分かる。直接袋に触れ
た場合、どうやら周囲に飛び散った液体を吸って湿ってお
り、「いい匂い」とは別の香りを発している。

部屋の中には「いい匂い」が充満しているが、この袋の近
くでは匂いが弱まっているのが分かる。

<目星>、<科学(生物学)>などに成功した場合、この部
屋の床についている痕跡はおよそ人類のものとは思えない
が、それに近い類人猿などが暴れた跡ではないかと予想で
きる。

そいつの痕跡は部屋からは追えず、どこに行ったのかはだ
けでなく、そもそもどこから入ってきたのか、というも分

からない。隠し部屋の階段の広さでは、入って来るのも不可能ではないか考えられる。

九戸の写真

九戸の家を調べると、彼が写真の趣味を持っていると分かる。これは彼の秘密の趣味で、風景などの普通の写真には興味がなく、これまで関わった女たちとその行為の記録を取っているのだ。

私小説という分野を執筆しているが、その濃厚な筆致はこういった記録が背景にあるおかげだ。

九戸のカメラのフィルムを現像する

九戸の書齋で発見したカメラに残ったフィルムの現像には、ロールは不要である。必要な機材が揃っていれば、可能だ。

新聞記者や探偵の探索者など、自前で写真を現像できる施設を持っているか、写真家と繋がりがあがるか、写真館などにフィルムを持って行くのもよいだろう。

現像された写真には十代と思しき少女が映っている。白黒写真なうえ、薄暗い室内で撮影されているため判別が難しいが、濃い黒髪に白い肌、やせ細っているように見えるががっしりとした肉体が見て取れる。

写真は最初の方は裸で様々なポーズを取っていただけだったが、次第に実際の行為となり、最後の方はSM趣味になる。

そのほとんどが服を着ていないが、首からお守りのようなものを下げているのが見える。特にロールの必要なく、九戸の地下室で発見した袋と同一のものだと分かる。

写真は言い訳のできないようなポルノ、SM趣味の写真だ。写真館などに持って行った場合、何らかの説明が求められるか、<信用>が減少するなどの社会的なダメージを与える可能性もある。

写真を現像し、確認して以降、探索者達は確実に煉を認識できるようになる。

探索者が吉原の十文字に探索者が赴いた際、見世で霧花の写真を見せもらうか、少女の写真を見せた場合、霧花と少女が似ている、血縁関係にあるのかもしれないと分かる。

写真館「木馬館」

麻布区の材木町駅の近くの写真館である。麻布区の盛り場、花街などの写真も扱っているため、一般の客が使うよりも玄人筋の客層が主である。

九戸が使っていたと示す手がかりは特に提示されていないが、写真の現像はプロが行っていた、九戸の家に近いなどから、麻布区の写真館を片端から調べるか、怪想社などの写真

も扱っている出版社に問い合わせしてみるなどでもよいだろう。

麻布区の材木町駅周辺で聞き込みをするか、怪想社などの筋から、九戸が普段使っていた写真館「木馬館」を教えてもらえる。特にロールの必要はなく時間をかけるだけでよいが、<幸運>などが必要としてもよいだろう（失敗すればより時間がかかったとなる）。

九戸の行為はこの時代では犯罪かどうか微妙だが、世間に広まればどのようなことになるかは分からないので、写真館の主人には<威圧>や、<言いくるめ>などの方が聞き入れられやすい。また、九戸の家で発見した写真を証拠として確認させるなどすれば、口を割りやすいだろう。

「木馬館」の主は、以下のように語る。

- 九戸が撮ったものを現像していたのはうちで間違いない。他で現像していたという話は聞いてない。
- いわゆるお得意様であるし、作家先生なので最初は無理に頼まれて現像していたが、金払いもいいので何度も受けてしまった。
- 写真の内容についてはあまり見ないようにしているので、詳しいことは分からない。幅の広い女性を撮っていたようだ。
- 変態趣味があるのは承知していたが、ここまでだとは思っていなかった。花街で女性の裸の写真を撮る趣味の人間は何人か知っているが、伊藤晴雨のような写真を撮っているのは知らない。

この他、探索者の質問には滑らかに答えるが、写真館の主が知っているのは九戸の写真に関わる情報だけである。

撮影事情：幕末にはすでに日本でも長崎に写真館が建てられるなど、すでに写真撮影が行われていたのは周知のとおりだ。銀板、湿板、乾板を経て、明治22（1889）年にはアメリカのイーストマンコダックがセルロイドのフィルムの販売を始めた。

当時のカメラというと大きな三脚を備えた蛇腹式のカメラを思い浮かべるが、フィルムの登場によって写真機の小型化はさらに進み、今までは手提げカメラぐらいだったものが手持ちカメラと言ってよいサイズとなった。相変わらず高価ではあったが、大正期には国産品も出回るようになり始め、写真を撮る趣味が広まる。

これに伴い、写真の現像や撮影をする写真館を営業写真館と呼ぶようになったと言われている。

留水村を調べる

探索者が独自に留水村を調べようとした場合、東北地方の出身者でも聞かないような村であるため、図書館などの記録に頼る以外はない。

図書館で<図書館>、キーパーが認めるならば<歴史>や<人類学>などで成功した場合、以下の情報を得られる。失

敗した場合でも、該当の村が東北のXX県に存在し、漁業を中心とした村であると分かる。

- XX県の海沿い、深く狭い湾の奥にある村で、陸の孤島。漁業を中心としているが、人口の減少が続いている。
- 村の起源や、いつ頃から存在するのかわからないが、江戸時代の記録も確認できる。
- 江戸時代、地元の藩の記録にも出て来る。この村から太平洋へ出たところが海の難所なのか、よく海難事故が起こっている。
- 海難事故と関連付けて、海賊の隠し砦ではないかという噂もあった。
- 珍しい奇祭があるが、秘祭であるためその内容を知るのは村人だけだと言う。一説では隠れキリシタンの類ではないかと言われた。

これらの情報は探索者が調査するのもよいが、「北上民俗学研究所」で北上に語らせてもよいだろう。

キーパーへ：留水村は事件の元凶だが、このシナリオでそこへ赴く必要はない。探索者の注意がそちらに向いた場合、「村の調査をするのはよいが、直接行く必要はない」、と告げてしまってよいだろう。

池袋、北上民俗学研究所

大正の震災前、池袋と言えば帝都の外れ、徐々に人口が増えつつあったが発展途上の田舎だった。明治末期に池袋駅が開業、震災前にも東上鉄道、武蔵野鉄道とも接続してターミナル駅となったが、相変わらず自然豊かな土地柄である。各種の百貨店が進出し、繁華街としてにぎわうのも震災後だ。

北上民俗学研究所は池袋駅の近くにある。研究所という看板は出ているが、ガラス戸の中は大小さまざまな陳列棚が並んでおり、まるで民芸品を扱う個人商店に見える。

棚に並ぶ民芸品には値札まで出ているところを見ると、本当に商店らしい。北は北海道、樺太から南は沖縄、台湾に加えて、満州に関わるものまで置かれている。それらには収蔵時期、場所に解説が加えられており、小型ながらもちょっとした博物館のようにも思える。

奥には帳場のような場所があり、そこには丁稚のような小僧が客に対して精一杯、愛想よく振るまおうと必死の笑顔を作っているが、声はかけてこない。

民芸品の解説を読む場合、探索者の出身の地方は自動で、そうでないときは<考古学>、<人類学>、<歴史>、あるいはキーパーによっては<科学(民俗学)>などによって以下が分かる(<科学(民俗学)>は通常の技能には存在していない)。

- 概ね解説は正しく、収蔵時期や場所を考えれば問題はない。

- 解説には独自の解釈が加えられているものがあり、非常に狭い地域の限定的な伝説や民話を採取した内容などが加味されている。
- 地元民でも聞いたことがない、存在が疑わしい伝承や、そもそもの採取地域なども出て来る。

探索者が<クトゥルフ神話>を所持している場合、この解説の中にクトゥルフ神話の痕跡を見出す。どうやら北上は、神話的事象の探究者、探索者らしいと分かる(自説を積極的に発表しようとしている、という点では危険人物のように思えるが)。

探索者が民芸品に興味を示すか、店番として奥の帳場の辺りから探索者の方を見ている丁稚のような小僧にたずねると、奥から北上を呼んで来る。

北上は非常に背の高い、体格がよく手足の長いうえに彫りの深い外国人のような顔をしているが、れっきとした日本人である。

彼は特に隠し立てするところは持っていないので、探索者の質問には素直に答えるし、<心理学>でも不審な点は見つからない。

- 小笠原浄について
彼は医者だが、民俗学に大いに興味を持っており、それで知り合いになった。
自分のパトロン(古井耕一)からの紹介だったか、何かの会合だったかは忘れたが、自説に興味を持ってもらっていた。
- 小笠原の行方不明
行方不明とは初めて聞いたので、何も分からない。
確か、4、5日前に東北にある留水村の質問をしに来たが、いまいち要領を得なかった。エスキモーやアイヌの神話が、アイヌのカムイがどうか、とりとめが無かった。唯一の共通点はどれも風に関わる悪神の話だ。
- 小笠原の行っていた悪神
分からない。さっきも言ったが要領を得なかったのだ。
ただ、留水村の信仰と関係があるようだった。
- 留水村について
東北の海岸線沿いにある、隠れたような村。周りを山に囲まれた上に、深い峡谷の内側に港を持つ漁村である。
そこを知ったのもたまたまで、独特の古い信仰を持っているというので興味を持ってフィールドワークにあたってきた。
古い時代の人身御供の儀式の痕跡があった。あるいはあまりにも貧しい為に漁だけでなく、海賊行為をしていた痕跡があった。現代ではごく貧しい寒村で、信仰もほとんど守られていないように見えた。
- 採取物はあるか

村のものを持ち帰るのは禁じられたため、採取物はない。

ただ、スケッチするのは許されたので、村の様子や建物のスケッチはある。

探索者がスケッチを見せてほしいと頼むと、北上は喜んで店の奥、研究所の方に探索者を案内する。

店の奥もまるで陳列品の倉庫のように見える。奥の方に北上が使っていると思しき物書きのための机が見えるが、それ以外は大小の棚、木箱が置かれて、何かが入っている布袋、紙袋が雑然と置いてある。

それぞれには分類か解説の紙が括りつけられており、おおまかな分類はされているように見える。

中にはおそらく北上によるスケッチなどもあり、彼の絵がさほど密度の濃い画ではないものの特徴をよく捉えたものだと分かる。

机の引き出しの紙束をしばらくひっかきまわしてから、見つけた紙束を探索者に渡して来る。

その表紙には『留水村記録 大正二年』と簡易な表紙がついている。スケッチは数十枚に及び、漁村での暮らしぶりがうかがえる。その中で目を引くのは次の3枚だ。

- 村から望む狭い湾内に浮かぶ鳥居のようなもの
海の上にある理由は分からないが、村の祭祀に関わるものらしい。彼らの祭儀は海が凍ってそこまで渡れるらしい。
- 神社で巫女服のような恰好をした少女
顔は詳細に書かれていないが、他の村人は老人ばかりだ。大事な村の子と言われた。
- 神社の内陣。内陣を隠す布の紋様が独特
この模様は日本では珍しい。織り方や縫い方は東北では珍しくもないものだが、この模様はもっと北の方、極地に近い人々のものではないだろうか。

これらの情報については、北上が惜しみなく与えてくれる(彼は教えたくてたまらないのだ)。

神社の内陣の模様は、先に聖路加病院で金の板を確認している場合、その類似性に気が付く。この点を北上に話すと、彼は留水村のルーツはもっと北、それこそ極地に近い民族が流れ着いたのかもしれないと語る。そして、独特な信仰とはそちらから持ち込まれたのではないかと推測する。

探索者が民俗学や置いてある民芸品に興味を示した場合、遠慮なく講義をしてくれるが、話が長くなるのは間違いない。

キーパーへ：この怪しげな「北上民俗学研究所」と北上はクトゥルフ神話の有識者として、今後の帝都における探索者達の助けとなる教授ポジションのNPCとして活用するとよいだろう。

吉原、妓楼十文字

キーパーへ：本シナリオにおいて吉原は特に重要ではないので、昼間に調査に訪れるのを想定している。夜の華やかな場面を演出したい場合は、キーパー各位でそれぞれの描写を夜向けに変更してほしい。

夜の吉原ならば人も多く、にぎやかで華やいだ、そして類焼的な雰囲気や漂わしているが、昼間は半ば寝静まったようなどこか気怠げな雰囲気が漂っている。

名物の吉原の大門はその名に反して門はなく、鉄製のアーチ状の構造物があるだけで、常時通行可能である(ここで止められるのは、出て行こうとする娼妓たちだけだ)。

探索者がよほどおかしな恰好や行動をしない限り、そのまま通り抜けられる。

女性である場合は少しおかしな顔をされるかもしれないが、娼妓たちを楽しませるための芸人や物売りの類も普通に入出入りしていたため、昼間であればそれほど問題にならないとしてよいだろう。

妓楼の十文字は京町一丁目の中ほどにあり、位置的、見世の大きさ的、張見世の格子の形から中ランク(いわゆる中見世)の妓楼であると分かる。

昼間のうちは、妓楼の娼妓たちは寝ているのが多く、夕方の営業開始に備えて妓楼内の各部署が動いているだけだ。

十文字はそれなりに老舗であり、1階部分にはかつて張見世、遊女たちが格子の後ろに並んで客を誘った部屋がある。今はそこには遊女たちの写真が飾られており、いわゆる写真見世というものになっている。

玄関で見世番をしている若い衆に用向きを告げれば、楼主や遣り手婆など事情の分かりそうなベテランの若い衆を連れて来る(キーパーの趣味でどちらが対応に出るか、決めるとよいだろう)。

基本的に賄賂を握らせれば、口は滑らかになる。キーパーは探索者の話の持って行き方や、職業、身分などによってコミュニケーション系をはじめ、各種のロールを求めてもよいだろう。

彼らから得られる情報は以下の通りである。

- 作家の九戸について
かなり前にうちに通っていた。その時分、霧花という娼妓に入れ込んでおり、一時は身請けするような話もあったが、金の切れ目が縁の切れ目、立ち消えになってしまった。その後、例の「今様籠釣瓶」が発表されて、ちょっとした話題になり、霧花にもよく客が付くようになった。
- 女衞の岩清水について
石清水も昔は吉原に入出入りするぐらいの商売をしていたが、そのうちにあくどい商売をやり始めて、姿を見なくなった。その時期に、何人かの娼妓はうちで雇った。今は何をしているかは分からない。
- 霧花について

正確には覚えていないが、確か当時、うちに入入りしていた女衞の岩清水の紹介で雇った。東北の方の出らしいが、それ以上は分からない。いろいろとひどい目にあったが、うちではそれなりに人気があって一時は見世の顔だった。色白だが誰の目からも美人と言うほどではなかったが、不思議と男を引き付ける魅力があった。

- 霧花のその後

契約通り、12年の年季を務めてうちを出ていった。その前に南部という男と懇ろになって、出た後はそこへ行ったと聞いている。その後は知らない。

- 南部について

ありゃあ、クズだね。顔は良いがチンピラの類だ。ときどき、霧花に金をせびりに来ていた。身請けする程の甲斐性がないので、年季が明けて一緒になったらしい。確か、今は深川の方に住んでいたと思う。

探索者が帰りかけると、ふと思い出したかのように「そう言えば、ついこの間、霧花を訪ねてきた女の子がいた。もういないと伝えて、深川の南部を教えておいた」と告げる。

女の子について尋ねると、「霧花の娘だ、と本人は言っていた」と言う。そして、「ああ、そうそう。霧花が最初来たときと同じ匂いだよ。間違いない。あの独特の『いい匂い』は忘れない」と、その女の子から「いい匂い」がしたと教える。

探索者が「いい匂い」を確認できるものを持っている場合、「これだ、同じだよ」と教えられる。

格子の形：江戸時代の吉原では、張見世の格子は店の格を表すものだった。小見世は総半籬という上半分がない格子、中見世は半籬で上の右側半分の格子がなく、大見世になると大籬と呼ばれ全面が格子だった。

写真見世：張見世は吉原の代名詞のようなものだったが、明治末期から大正期にかけての廃娼運動で、「張見世の如く、女性を檻に入れているようにして、見世物にするなどけしからん」、というものがあつて廃止された。その代わりに娼妓の写真が並べられ、それを見て娼妓を指名するようになった。この写真はばっちり着飾ったうえに、専門家が撮影したものであったため、指名後にトラブルの原因となった。

浅草、十二階下

浅草の十二階と言う名で親しまれた凌雲閣は、明治中期には経営不振によって建築当初所有していた会社から売り渡されるとともに、正式に十二階という名前が変わった。

1階に演芸場を追加したり、エレベーターを修復したりと様々なてこ入れを計ったが、客足は戻らず、上野駅に来るお

上りさんの目当ての一つ、十二階下へ導く目印として有名だった。

探索者が十二階下に踏み込んだ場合、以下の描写を読み上げる。

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

「その小路の暗き所、横丁の灰色な空気の中に鼠鳴きして嫖客を迎へるさま金切声を絞つて『チョイトチョイト』と泣いてゐたのは昔の事で、今は摺硝子の薄暗い中に蠢々乎として低声に男を呼んでゐる一場の悲惨な光景は描き出されるのだ。

そして数多の横丁新道にも盛衰栄枯があつて、何新道は玉が揃つたとか何横丁は醜婦ばかりだとか遊治郎は品評してゐる。当今では猿之助横丁が美人揃だといつて蕩児が騒いでゐるさうだ」

『千束町探訪記』文芸倶楽部、大正二年四月号より

—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—・—

銘酒屋、鼈遊

鼈遊（べつゆう）の場所は象潟署で聞いているか、銘酒屋として看板も出しているため探せば見つかる。

店は銘酒屋とは言うが、いかにも申し訳程度の土間に机と背もたれの無い長椅子、狭い店の中には酌婦と思しき年齢不詳の女と、用心棒を兼用しているのであろう同じく年齢不詳の男が警戒した様子で探索者のほうを見ている。

銘酒屋「鼈遊」は十二階下に数多ある非合法の売春宿だ。当然、店はもちろん、そこに居る女たちも鑑札や許可を受けてはいない。遊びに来たわけではない探索者を彼らは大いに警戒する。

当時、素見（ぞめき）などと呼ばれる、見るだけのプロのような客も居たため、探索者がそのように装ったりするのも面白いだろう。もちろん、普通に遊びに来た客を装うでもよい。

探索者の話の持って行き方によるが、この場でコミュニケーション系のロールは＜言いくるめ＞以外ではハード以上が求められる。もしも、プッシュロールに失敗した場合は、銘酒屋から追い出されるだけでなく、十二階下の地域から怪しい客であると認識されるようになる。

コミュニケーション系のロールを行わず、単純に金を握らせて話させる、公権力を濫用するなどでもよいだろう。

銘酒屋で得られる情報は以下の通りである。

- 女衞の岩清水がどうやって女を仕入れているのかは、こちらは関知してない。
- 最近、上野で出会った少女をお得意先の作家先生に紹介したと聞いた。
- その少女は、随分前になるが吉原に紹介した女によく似ており、娘ではないかと話していた。
- そういえば、行方不明になる直前に「いい匂い」がしていた。

彼らは出会った、紹介したなどごまかしてはいるが、騙して売り払ったというのは明白だ。

探索者が「いい匂い」のするものを持っていて確認した場合、岩清水からした「いい匂い」と同じだと認める。

深川、南部を探す

このイベントは、煉が吉原の十文字を訪れた後に行う必要がある。ほとんどの場合、問題はないだろうが探索者の動きが早い場合は注意すること。

深川でも橋が架かり、鉄道が通って発展した地域から離れた地域、貧民窟のような場所に南部は住んでいる。

南部はその貧民窟の長屋のような建物に住んでいるが、自ら稼ぐ手段を持っていないようなものなので、木賃宿よりもマシなレベルの長屋の家賃もすでに滞っている状態だ。

南部の住居の詳細は分からないが、深川で彼の風体を探して聞き込みを行えば、貧民窟の住人にいくらか渡すなどすれば、長屋へと案内される。その際、霧花について尋ねた場合は、1年ほど前までは確かに女が居たのは分かるが、1年ほど前から姿を見ていないと言われる。

南部の住む長屋

南部の長屋に探索者が赴くとき、<信用>が10以下ではない場合、基本的に周辺の住民からは警戒される（赴く先が貧民街だと分かっているので、<変装>して行くのもよいだろう）。

案内された南部の部屋は木造の長屋のような作りの建物で、その半ばにある。防犯、防音性も皆無の薄い板の引き戸の入り口に鍵は掛かっている（鍵を掛ける習慣は、西洋式のドア、それを備えた商店や個人宅の普及によるもので、大正の頃には庶民にも広がりつつあった）。

鍵は掛かっているが、探索者が引き戸に手をかけたタイミングで背後から声が掛かる。

若く見えるが年齢不詳の、いかつい顔と身体をしたチンピラともヤクザとも言い難い男が、探索者の方を威圧している。この男は長屋であんちゃんと呼ばれる、世話役、取り纏め役のようなもので、少し異なるが町内会長みたいなものだ。

<威圧>で対抗してもよいし、<言いくるめ>などでかわすのもありだが、ハード以上の成功が求められる。長屋のあんちゃんは<威圧>を50%以上持っているだけで、探索者に敵対的ではないし、南部を守ろうとしている訳でもないの、キーパーの判断で探索者が適切な説明をできたとするなら、難易度を通常に変更したり、ロール不要としたりしても問題ない。

ロールに成功した場合、長屋のあんちゃんは他の住民にも解散を命じて去っていく。失敗した場合、探索者が出ていくまでそこを動かない。強引に南部の部屋に入ろうとした場合、あんちゃんを含めた大工道具や工事道具を手にした長屋

の住民が探索者の方へ動き始め、探索者がやめようとしないう場合は袋叩きにされ、1D10の耐久力が減少したうえで長屋の外に放り出される。逃走するのは可能だが、<DEX>の対抗ロールを行う。

プッシュロールに失敗した場合、探索者は自動的に袋叩きにされる。

南部の部屋

いかにも古い、そして貧民窟の長屋らしい土間に4畳半の部屋だ。中は外より少しマシ程度の暖かさで、無人なのは見ただけで分かる。

この4畳半にはほとんど家具はなく、押し入れなどの物入れの類もない。部屋の奥の方に布団が引きっぱなしになっている他は、汚れた衣類や使って洗っていない食器の類が床に転がっているだけだ。

引き戸を開けた瞬間から、中から不快で不潔な人が獣のような匂いがするがその中に「いい匂い」が混じっているのに気が付く。

部屋の中はこの寒さがあってもじっとりとしており、どこを触れても妙にねばつく感じがする。敷きっぱなしの布団や、洗っていない衣類などを調べればそこから「いい匂い」がする。

その他、男物の衣類の類や、片付けられていない食器の類、腐った食べものなど、手がかりになるようなものはない。

吉原の妓楼十文字で聞いた話では、年季が明けた後の霧花を引き取ったはずなので女ものの衣類なども見付かりそうだが、それも存在していない。南部は、霧花が死んだあと、不要になったその持ち物を全て金に換えているのだ。元々、霧花の持ち物も少ないため、ほぼその痕跡はなくなっている。

南部の部屋を見た前後で、長屋のあんちゃんが話しをしてくれる状態である場合、以下のような内容を聞ける。あんちゃんは記憶力がいい方ではないので、具体的に何年前などの数字は出てこない。

- 南部について
何年か前に越してきた。羽振りがいいとは言えなかったが、最初の方は何か稼ぎがあって、店賃が滞らなかった。ここのところはこちらから催促に行くのが多くなった。
- どこに行ったか
知らない。ふらふらしている奴なので、どこに行ったかは分からない。ここのところ遊ぶ金も無いようだったから、どこかに金の無心にでも言ったのではないか。
- 女について
何年か前に一緒にいたが、ここ1年ぐらいは見えていない。どうなったかは分からない。長屋の住民同士、助け合いはするが、細かい事情には首を突っ込まない。

その場合、誘惑に乗った探索者はクライマックスにおいてイタクアにさらわれる可能性がある（**死亡確定である**）。

煉から話を聞く

探索者の下で落ち着いた煉から話を聞くのには、ロール等はいらない。ただ、煉が話しをするのは、よく懐いている、食事をくれて優しくしてくれる探索者に対してだけだ。

彼女は探索者の質問には素直に答えるが、答えたくない内容は黙りこんで答えない。また、田舎の寒村で最低限の教育も受けてないため、一般常識にも欠ける。

- 煉自身について
XX県にある留水から来た。村から出してもらえないので、病気だと言って病院に行き、逃げ出してきた。
- 留水村について
XX県の海沿いにある小さな村。何もなし。叔母の弥栄香が村を取り仕切っている。
- 帝都に出てきた目的
東京には母親を探しに来たが、手がかりが少なく、結局見つからなかった。
- 帝都での出来事
分からない。
- 稗貫を目撃した後
留水の人間だと思う。確か弥栄香の下男のような人だった。村では珍しい漁師ではなく、猟師で山の方に住んでいた。

<心理学>に成功した場合、身体つきや彼女自身の語る内容から推測される年齢より、精神の年齢が幼いと気が付く。幼さ故の邪悪さがそのまま育ち、嘘を吐くのを思いついたりしないのではなく、その必要がない環境で暮らしてきたのが分かる。そして、そのような環境から帝都で過酷な目に遭遇したため、生来の邪悪さが大きくなりつつあると推測できる。

探索者の家の周り

煉を保護した後、その探索者の家の周囲はさらに気温が下がり、吹雪がひどくなる。

他の探索者が一旦自分の家に帰るなどして、遠い距離でそれを見た場合、明らかにその周辺だけ吹雪が激しく、空には黒い雲が掛かっているのに気が付く。

帝都全域が吹雪いているのは確かだが、煉を保護している探索者の家の周囲はまるで白い壁が出来ているように、さらにひどい。上空を見上げた場合、<幸運>に失敗すると黒い雲の中に赤い二連星を発見してしまう。

追跡者、稗貫

探索者が煉を保護した次の日の夜、稗貫が忍び込んでくる。彼は侵入後、「いい匂い」を辿って最短距離で煉に到達

する。キーパーはあらかじめ、煉を保護している探索者が住む家の間取りなどを聞き出し、図を示すとよいだろう。

探索者が追跡者を警戒し、機械的な罠を仕掛けていた場合、稗貫は必ず引っ掛かる。そうでない場合、寝ずの番などしていなければ、<聞き耳>のハード以上の成功が求められる。失敗した場合、忍び込んだ稗貫に気が付かず、煉の悲鳴を聞いて飛び起きる。

稗貫には煉を傷つける意図はないため、煉には拘束（マヌーバー）を試みるが、探索者には容赦なく攻撃をしてくる（素手だが）。

稗貫に対して煉もマヌーバーで抵抗する。キーパーは実際にロールしてその結果を適用してもよいし、望む結果を適用してもよい。また、煉自身も容赦なく稗貫に殴り掛かる。

探索者が稗貫の耐久力を半減させるか、探索者が銃を所持しているなど、明らかに旗色が悪い場合は撤退を選択し、手近な出入口、窓から屋外を目指す。

もしも、稗貫が探索者に捕まりそうになった場合、彼はウェンディゴの姿を表して空中を走って逃げる。

南部のウェンディゴの姿を目撃した場合、0/1 D 6 正気度ポイントを失う。

南部の死体と足跡

逃げた稗貫を追って屋外に出るか、稗貫を追い払った後、何か大きなものが落ち様な音を聞く。それは屋根の雪が落ちたとは思えないような重い音で、単純な塊が落ちたものではないように思える。

深夜になると前日も増した寒さだが、吹雪が信じられないぐらいに晴れている。探索者が外を見ると雪の上に巨大な足跡が残っているのに気が付く。これは九戸の家に行く途中で見たものと同一だが、この足跡が何か落ちたような物音とは一致しないはずだと分かる。

探索者が外に出れば、南部の凍った死体が雪の上に落ちている。これまで見てきた岩清水、九戸などと同じように凍り付いており、その落下地点の周りには何の痕跡もない。まささら雪の上に、ただ南部の死体だけがあり、どこから投げ落とされたか分からない。

南部の死体を調べた場合、九戸の場合とほぼ同じだと気が付く。そして、「いい匂い」が彼の死体からも漂っているのが分かる。

煉に南部の死体を確認させた場合、彼女は目を背けながら知らないと言いきり、その場を逃げ出して屋内へ戻る。

探索部：その他のイベント

これらのイベントは時系列や探索の対象と関係なく、キーパーの好きなように差し挟んでいく内容となる。

探索者が何か興味を向けた場合などでもよいだろう。

帝都上空の怪異

カフェなどの休憩中や、怪想社に立ち寄った、あるいは探索者に陸軍の関係者がいる場合などに、噂として聞くようにするとよいだろう。

稲毛飛行場は東京府の隣、千葉県稲毛海岸にある飛行場だ。帝都からあまり離れていないにもかかわらず、天候は悪くなく、時折強い風や冷たい空気が流れて来るのを除けば、例年よりも少し寒いだけだ。

上空に上がってしまえば天気も関係ない、と悪天候の合間を縫って飛行機を飛ばしていたが、帝都の上空を通過したパイロットが妙なものを目撃したと噂になっている。

帝都上空を覆う厚い雲の中に、巨大な人影のようなものを見たというのだ。この目撃談は、パイロットの間では有名な噂になっている。

一人の命知らずの、無謀なパイロットがそれに接近を試みたところ、そいつがまるで人のようにこちらに気が付いて、頭と思しき部分をこちらに向けると、赤い目がパイロットを見た、という。

件のパイロットはその後、錯乱して脳病院へ収容され、治療を受けているという噂だ。

大正期の飛行機：明治末期から日本でも飛行技術を海外で学ばせるとともに、飛行機を輸入しての飛行実験が行われるようになった。

最初は軍部主導であり、明治 44 (1911) 年に所沢に試験場が作られたが、大正 2 (1913) 年には民間主導とするのを目的とした帝国飛行協会が創設され、飛行機の国産化が盛んになる。

この他、外国から飛行家を招いて飛行会（今で言う航空ショーのようなもの）が開かれるようになり、飛行機には乗らないが、見る事だけならば珍しくはないものとなった。大正 9 (1920) 年に陸軍省に航空局を設置、翌 10 年に航空法を制定。大正 11 年に民間の空輸が堺－高松間で、翌 12 年には東京－大阪間で開始される。

異常気象、寒波

天気について調べた場合、官報、新聞などに載る天気予報はすべて「予測不能」の文字が並んでいる（天気予報は中央気象台の出した天気予報を転載しているようなものなので、すべて同じになるのはおかしくはない）。

気象の専門家に聞く、図書館などでそれまでの例年の天気などを調べた場合、記録が残っている限り範囲では東京でこのような猛吹雪に襲われるのがまれであると分かる。

一時的になら吹雪や寒波などもあるが、まるで異常な低気圧と寒気が居座っているような状況は、異常気象としか表現できない。

たまに上空を見上げると黒い雲の塊の中に巨大な人のような人影が見えたと噂になっているが、東京上空でそのような雲が停滞し、見る事がまれであるため、不安がった市民の根の葉もない噂であろうと言われる。

天気の確認を帝都だけでなく全国まで広げた場合、この異常な寒気は北の方が降りてきて居座っているのが分かる（それ自体は異常ではないが）。

天気予報：明治 16 (1883) 年に気象台「天気報告」が発表、その後「天気予報」として予報を出すようになった。明治 21 年には官報に天気予報が載り、予報時間が 24 時間後まで（要は明日の天気）になったので、新聞なども欄外に載せるようになる。この後、大正 14 (1926) 年のラジオ放送開始から天気予報はあった。

帝都を外から眺める

探索者自身がシナリオ中で帝都の外に出ていくのはあまりないため、知人、友人、関係者が東京市外から帰って来て語るなどすればよいだろう。

その際、以下のような帝都の状況を知らされる。

- 東京市を離れると、天候はそれほど悪くはないし、気温も例年よりは多少低い程度になる。
- 東京府の外れまで行くと、ほぼ例年通りの寒さである。
- 東京市の上だけに巨大な雲が停滞して覆われているように見える。
- 特に東京市の中心部には厚く、黒い雲がかかっている、そこが吹雪の中心のようにも見える。

吹雪の中心の黒い雲の中に、イタクアは隠れている。

帝都の外から見ると、イタクアが居座って起こしている異常気象は明らかだ。本来、邪神は「風に乗って歩むもの」の名の通り、長い間一つ所に停滞しない。

赤い二連星

このイベントは探索者がイタクアの存在に気が付き始めるか、九戸の家の探索が終わった後など、イタクアが近くにいるタイミングで行う。

探索者は、空に赤い星が二つ並んでいるのに気が付いた。

猛吹雪の中、鈍く光るそれははっきりと見えていたが、今は夜ではない。夜だとしても、吹雪の中に見える星などありえなかった。

最初はその赤い光以外は分からなかったが、その周辺に黒い影のようなものが見えて来る。

それはまるで、巨人の目が赤く光っているように思えた。

イタクアの赤い目に気が付いた探索者は0 / 1 D 4 正気度ポイントを失う。

イタクアはまだ探索者には興味を持っていない。ただ、近くにいたために、探索者の方が気が付いてしまったのだ。

クライマックス

煉を保護した後、探索者がまだ他の調査や何らかの行動をしようとしている場合、イタクアに見付かったがどうかを<幸運>ロールで決めてもよい。その場合、1日毎に有利→通常→ハード→イクストリームの順に難易度が増す。

あるいは、キーパーの判断でこのロールなしで見つかる、見つからなかったことにしてもよい。

それぞれの結末で登場する可能性のあるイタクアの詳細は、“新クトゥルフ神話 TRPG マレウス・モンストロルム Vol. 2 神格編”の54ページを参照。

赤気は闇夜に至りて

その日は何故か今までと異なり、風は凜いで雪もなく薄曇りで、久しぶりに弱いながらも日が差し込んでいる。

穏やかな一日が過ぎ、陽が落ちてしばらく経つと、月の無い星空が次第に赤みを帯びてゆらめき始める。<科学（天文学）>、<自然>ロールに成功すれば、これが『赤気（せっき）』と呼ばれる低緯度で見られる赤いオーロラだと分かる。そうでない場合、この異常で希少な気象現象を目撃した探索者は1 / 1 D 4 + 1 正気度ポイントを失う（『赤気』を知っている探索者が居る場合、正気度の減少は半分で済む）。

風に乗って歩むもの

煉の「いい匂い」によって、彼女は早晚イタクアに発見される。煉が探索者に懐いている場合、イタクアに「いい匂い」を嗅ぎつけられて、そうでない場合は彼女自身がイタクアを呼び寄せる。

キーパーの判断、好みでクライマックス場面を演出するとよいだろう。

イタクアの訪問を受ける

赤気が空を覆った夜中、突如、何か重いものが近くに落ちたような音が響く。辺りは静まり返っており、雪も降っていないがこれまでで一番の冷え込みだ。

しばらくすると再び、さらに近くで同じような音が轟く。探索者が外を見ると天を衝く巨人の影が、こちらへ向けてゆっくりと歩いてきているのが分かる。もしも、探索者が外に出ない場合、煉が自ら外へ赴く。

揺らめく赤い空に輝く赤い二連星を探索者が見つけると、それがこちらを見返した気がする。

赤い目を思わせるそれが頭部、顔にあたるのだと認識すると、影のような巨人が赤い空を立っていることが分かる。

重い音が響くと、影の巨人の水かきのようなものを持った足が、巨大な足跡を穿った。それはいつか、九戸の家の近くで見たそれと同じだった。

影の巨人は実体をともなって探索者の前に聳え立っており、その赤い目が探索者をはっきりと捉えた。

イタクアを目撃した探索者は、1 D 1 0 / 1 D 1 0 0 正気度ポイントを失う。

このとき、煉と一緒に外にいた場合、彼女は正気度を喪失しない。イタクアには慣れているのと同じ状態である。しかし、彼女はイタクアを見た瞬間、この目前にいる異形が自身の父親であると直感的に気が付き、行動を停止してしまう。

イタクアは煉に向かって手を伸ばして、拾い上げようとする。邪魔するものがない場合、イタクアは生贄である煉を拾い上げてそのまま去っていく。

もしも、探索者からも「いい匂い」がしている場合、煉と<幸運>の対抗ロールを行う（煉の<幸運>は50とすればよいだろう）。敗北した方がイタクアに生贄だと判断されて拾い上げられる。引き分けだった場合、イタクアは迷って次の<幸運>の対抗ロールまで決定を持ち越すことにするか、イタクアに近い方が対象となる。

イタクアに抵抗する

この場に現れたイタクアは、通常巡回している極地よりもかなりの低緯度にまで降りてきているのに加えて、長期間の吹雪を帝都に引き起こしているために相当なエネルギーを消費している。

邪神の考えることは分からないが、そろそろ飽きてきていることもあり、探索者から反撃を受けると生贄を諦めて極地へ戻って行く。

イタクアが帰るまでの耐久力を20点とするが、「名状し難しい匂い」を発する物質を命中させた場合、即座に手を引込めて帰っていく。

「名状し難しい匂い」はイタクアを退ける威力のあるものではないが、すでにやる気を失っている邪神が帰るきっかけとなるほどの嫌がらせなのだ。

（この場でイタクアが直接降りてきたり、風を起こして巻き上げたりしないのもMPの節約のためである）

鍊を渡す

探索者が煉の正体を察している場合、彼女をイタクアへ返すのもおかしくはない。

参考資料、その他

本シナリオで主に参照した資料等を記載する(敬称等省略)。

- クトゥルー 4 青心社
『風に乗って歩むもの』、オーガスト・ダーレス、菊池秀幸・高橋直訳
- ウェンディゴ 有限会社アトリエサード
『ウェンディゴ』、アルジャーノン・ブラックウッド、夏来健次訳
- クトゥルフ神話アンソロジー 2 深淵ドラッグフェニールの絵画・3 phenyldruger
『響するために風は吹く』、日野裕太郎
- ウルトラ Q TBS/円谷プロ
第5話『ペギラが来た!』、第14話『東京氷河期』

- 新クトゥルフ神話 TRPG 株式会社 KADOKAWA
- 新クトゥルフ神話 TRPG マレウス・モンスターロム Vol. 1、2 株式会社 KADOKAWA
- クトゥルフ神話 TRPG クトゥルフと帝国 株式会社 KADOKAWA

- 浅草十二階計画
https://www.12kai.com/top_12kai.html
- 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/>
- 『大正略字』フォント
表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。
<https://booth.pm/ja/items/363104>
※フリーなのでぜひ、ご活用を!

- 帝都モノガタリ
<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

ダーレスの『風に乗って歩むもの』……のはずが、ウルトラ Q、『東京氷河期』シナリオです。

ダーレスの神話小説とえばいまいちな作品が多いですが、『風に乗って歩むもの』は傑作です。一読をお勧めしたいところですが、青心社のクトゥルーシリーズは手に入りにくいのが現状なので、どうかしてもらいたいところです(たまに重版されますが部数が少ないのか、すぐになくなります)。

今回は『風に乗って歩むもの』リスペクトな作品群を参考にしつつ、登場人物がだいたいクズという悲惨なシナリオです。好みに分れると思われませんが、NPC を助けるのに必死にならなくてもよいシナリオだと思ってもらえれば。

奥付

発行日：初版 令和6年8月11日

発行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(Twitter: @EDO_RAMv200)